

# 漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第一章

著者／流遠亜沙

---

ASSAULT-SYSTEM 文庫

## 漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

### 第一章

第一話 漆黒の狂襲姫……4P

第二話 鋼鉄の慟哭……15P

第三話 その日、クスノセ機獣派遣事務所……28P

第四話 残酷でただ美しい青空……42P

第五話 オーバードーズ（前編）……57P

第六話 オーバードーズ（後編）……71P

第七話 想い、少しだけ……89P

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第一話

銀河の遙か彼方にある惑星Z-i、そこには優れた戦闘能力をもつ金属生命体『ゾイド』が存在した。

ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Z-iにおける戦いにおいて最強兵器として君臨していた。

現時点で最後の戦争である（大戦）は終わり、人々の間には束の間の平和が訪れた。

しかし、戦争が終わっても人々の間に争いが無くなる事はなかった。

生きる事は戦う事であり、行き続ける限り戦う事をやめる事も出来ないのだらう。

——恐らくはヒトも、ゾイドも……。

## 第一話 漆黒の狂襲姫

東方大陸の北西部、ヒュウガノダ港とミヤコノ・シテイを結ぶ街道を移動するものがあった。全高七メートルを越す巨大なオオカミ型の戦闘機械獣——ゾイドだ。

機種はコマンドウルフ・タイプ。

かつてヘリック共和国軍で正式配備された、高速戦闘並びに情報収集・隠密作戦と幅広く運用された機体であり、その運動性能の高さと扱い易さから根強い人気を持つゾイドである。

軍で使用されていた機体のほとんどは共和国の象徴である白で塗装されているが、この機体は闇色の漆黒に塗られ、紅いラインが各所にアクセントとして加えられている。右の首元には逆十字のマークが入ったプレートが装飾品として飾られ、左の首元には二条の傷跡が確認出来る。

他に通常機との違いを挙げるなら、腰部から突き出た一对のブレード状のユニットだろう。ハイブリッド・スラスタ・バインダーと呼ばれる装備である。

この巨大なオオカミ型の機体の正式名称は〈コマンドウルフDFC〉——通称〈ヤミヒメ〉と呼ばれている。

闇色の姫。

故に〈ヤミヒメ〉である。

その頭部に設けられたコクピットには一人の青年が座っていた。

伸ばし気味の黒髪と、眠たそうな黒い瞳。やや痩せ型の体躯。年齢は二十代前半くらいだろう。

美形という訳ではないがそれなりに整った顔立ちをしており、十人も女性が居れば二人は興味を持ちそうな容姿をしているのだが……いかんせん、何かに疲れたような物憂げな表情が限りなくその数をゼロにしていた。

青年の名前はアサト・タチバナ。

〈ヤミヒメ〉のパイロットである。

「……ふう。街を出て三時間か、いい加減出てきてくれないもんかね」

『目標の出没時間や位置に法則性がありません。恐らく常に移動して、獲物を見つけては襲っているものと思われます。』『彼ら』が食いつくまで待つしかないかと』

アサトのぼやきにそう答える機械音声は、〈ヤミヒメ〉に搭載されたサポート・ユニット『クノキ』のものだ。アサトの事を『マスター』と呼び、〈ヤミヒメ〉の操縦のサポートや情報管制等も担当している。

「判っちゃいるんだが、どうにもな」

そう言つてアサトは中途半端に伸ばした髪を鬱陶しげに搔き、仕事の内容を思い返す。

ゾイドに関する仕事ならなんでも受け付ける——という触れ込みで『なんでも屋』稼業を営むゾイド乗りであるアサトは、現在『仕事』の真つ最中である。

東方大陸の貿易の要所の一つであるヒュウガノダ港と、アサトの住むミヤコノ・シティを結ぶルートには二つの選択肢がある。一つは航空機による空路。もう一つは地上を行く陸路だ。

経済的な事情もあり、よほど急を要さない限り、ほとんどの人間が陸路を利用するのだが、そこにゾイドを使つて通行人を襲撃し、金品を強奪する連中が現れた。

長きに渡る〈大戦〉と呼ばれた戦争が終結して約半世紀が経過していた。とはいえ、それで全てが丸く収まる訳ではない。戦争によって利益を得ていた者、戦争の中でしか生きられない者もいる。

全ての人間が同じ『平和』を享受出来はしない。  
戦争に敗れた者。

平和に馴染めない者。

平穏を望まない者。

それぞれの価値観が違う以上、様々な軋轢や不満が発生するのは仕方がない事かもしれない。そして万人が納得するような対応・政策が採れない以上、どうしても少数派の人間は切り捨てられる。

仕方がないことではある。

しかし、『仕方がない』で割り切ることなど出来はしない。そういった人間の不満はいつか爆発し、また争いが起こる。

恐らくはどこまで行つてもその繰り返しだろう。

（——くだらない人間の、くだらない事の繰り返しか……）

『マスター？』

アサトの無言をどう思ったのか、クノキが声を掛けてきた処でアサトの思考は中断した。

「ん、なんでもない。クノキ、盗賊団のデータを出してくれ」

『了解しました』

落ち着いた女性の声を彷彿とさせるクノキの応答と共に、モニターに映像が映し出される。映像には盗賊団の規模と所有する装備、被害報告等が記載されていた。

ここ一ヶ月の被害件数は報告されているだけで十件。治安警察に届けは出されているものの、担当区域外である町の外の事件に対して積極的な動きを取れずにいた。そこで治安警察に見切りをつけたミヤコノ・シテイの災害課が、アサトの所属する〈クスノセ機獣派遣事務所〉へ盗賊退治の依頼をしてきたという訳だ。

報告されている盗賊団の戦力はモルガ・タイプが六機

〈モルガ〉は突撃戦用に開発され、桁外れの生産台数を誇るイモムシ型ゾイドである。分厚い装甲と突進能力を持ち、後部のコンテナは様々な装備を換装できる高い汎用性を持つ。かつては常に部隊の先陣を切って戦った機体である。

ちなみに現在の〈ヤミヒメ〉の武装はホーミング・レーザーが計六基、背部のAZ二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キャノンが一基。あとは格闘戦用のツメとキバ。

数の優位性が揺るがない以上、近接戦闘は避け、相手の射程範囲外からの狙い撃ちを見越した装備だ。

盗賊団のデータと戦術プランの再確認にも飽きが来た頃――

――ピピッ！

短い電子音と共にアサトは瞬時に臨戦態勢に移行する。

「――掛かったか！」

モニターに表示されていたデータ映像が消え、代わりに望遠カメラが捕らえた六つの機影が映し出された。幸い、向こうは〈ヤミヒメ〉の接近には気づいていない。ただでさえ

〈モルガ〉は索敵能力が著しく低いのだ。

「数は情報どおりだが……〈キャノリー〉がいるな」

〈モルガ・キャノリー〉――最大数の量産機である〈モルガ〉を多様に生かすため開発された長距離用のキャノンを装備した機体である。

『恐らく強奪した物資にあったものを、現場で取り付けたものと思われます』

「被害報告には無いな、そうなるかと密輸品か」

どんな法にも抜け道はある。そういった方法のひとつに密輸があるが、正規の手段を講じずに運んでいたものを警察に届けられるはずもない。

「やっかいだな」

〈キャノリー〉二機を中心にして同心円上にノーマル・タイプ四機が周囲を固めている。



『敵の索敵圏外から狙撃できるのは、こちら側に近いノーマル・タイプ二機のみです』  
「それで残り四機か、〈キャノリー〉の射程はどのくらいだと思っ？」

『正規の装備でない事、正規の整備手順を踏んでいない事を考えると、有効射程は本来の四割減と推測されます』

「判った——まずはこちら側の二機を潰す。次に〈キャノリー〉だ。上手くすれば残りのノーマル二機と合流される前に叩けるだろう。あとはどうとでもする」

『了解しました。戦闘態勢に移行します』

「ん、サポートよろしく」

そして気負うでもなく、高揚こうようするでもなく、『もう一人の相方』に声を掛ける。

「待たせたな〈ヤミヒメ〉——出番だ」

——ウオオオオオオッ！

「落ち着けよ。本・当・の・出・番・は・ま・だ・だ」

待ちかねたように咆哮する〈ヤミヒメ〉をなだめつつ、アサトは狙撃用のバイザーを降ろす。

面倒な照準と補正はすべてクノキがやってくれるが、引き金を引くのはパイロットであるアサトの仕事だ。

「まず一機」

空気を切り裂く轟音と共に射出された砲弾は、正面左側にいた〈モルガ〉のコクピットを一撃で貫いた。

「——次」

そして二機目の撃墜を確認する間もなく、二つ目の標的を捉え、更に引き金を引く。

吸い込まれるかのように二機目の〈モルガ〉のコクピットに砲弾は引き寄せられ、鋼鉄の機体は無骨な鉄くずと化した。

「よし、次は〈キャノリー〉だ。クノキ、射程内に捕らえたらすぐに撃て、俺は操縦に専念する」

『了解。火気管制システムを一時お預かりします』

バイザーを座席後部の定位置に戻し、操縦桿そうじゅうかんを握りなおす。

「向こうはまだ状況に気づいていない。一気に畳み掛けるぞ」

『了解。御武運を』

「お互い様だろ」

苦笑しつつ、アサトは〈ヤミヒメ〉キャノリーを次の目標に向かわせた。



盗賊団の一番下っ端——〈モルガ〉六番機に乗る男は、何が起きているのか状況が理解できないでいた。

自分と同じくノーマル・タイプの〈モルガ〉で警戒をしていたはずの内、二人から定時連絡が来ない。恐らく昨夜の酒が抜け切らずにコクピットで眠りこけているのだろうと気にもかけずにいると、突然の警報がコクピットに鳴り響いた。

反応のある方向に機体を向けると、ものすごい速さで盗賊団のリーダーの乗る一番機——〈モルガ・キャノリー〉に迫る漆黒の機体がモニターに映った。

黒いカラーリングに見慣れない装備をした〈コマンドウルフ〉に何の抵抗も出来ず、二発の砲弾を頭部装甲とコクピットに受けて沈黙するリーダー機。

やっと有効範囲に入ったのか、背部のキャノリー・ユニットで応戦する二番機だったが、長距離戦用というのが災いした。一度は有効射程内に敵機を捕らえたものの、黒い〈コマンドウルフ〉の圧倒的な加速性能をもって近接戦闘距離に持ち込まれた二番機も、為す術なくコクピットに鋭利なツメの直撃を受け沈黙した。

男は混乱した。

何が起こってる？

あの黒い〈コマンドウルフ〉はなんだ？

奴の現れた方向にいたはずの三番機と四番機はどうした？

……そもそも自分は何をしているのだ？

そんな現実逃避にも等しい思考のループに陥おちいっている内に、勇敢にも正体不明の敵機に突撃した五番機が、機体の側面に二連装キャノンの直撃を受け横転する様を、男はただ呆然と眺める事しか出来なかった。

すでに自分が次の標的となっていることにも気づかずに——



戦闘は順調だった。

首尾よく二機目の〈モルガ・キャノリー〉を墜とした時点で〈ヤミヒメ〉の損害はなし。

残る二機の〈モルガ〉の内、一機はまったく動きを見せない。

「びびって動けないのか？ ……悪いが仕事だから」

勇敢にもこちらに突進してきた〈モルガ〉を直前で避け、アサトは〈モルガ〉の無防備な側面に至近距離からの砲撃を浴びせる。〈モルガ〉は五回六回と横転し、左脚——と言  
うのだろうか——の車輪を派手に吹き飛ばした処でようやく停止した。

「あとはあいつか……クノキ、あの〈モルガ〉に通信を繋げられるか？」

『了解。強制的に通信回線を開きます』

——ザザッ、という短いノイズの後通信回線が開く。

「聞こえるか？ こちらは〈クスノセ機獣派遣事務所 所属の『アサルト』だ。武装を解除して投降するなら命の保障はする」



なにも出来ないでいた男はただ〈モルガ〉のコクピットで震えていた。

次の瞬間には砲撃で、もしくはコクピットごとツメで潰されるかもしれない恐怖で彼の頭の中はパンク寸前だった。

そこへ急に通信が繋がると、聴きなれない男の声がノイズ混じりに聴こえてきた。

『聞こえるか？ こちらは〈クスノセ機獣派遣事務所 所属の『アサルト』だ。武装を解除して投降するなら命の保障はする』

混乱した頭で通信の内容を理解するのは困難だったが、命の保障はするという言葉に徐々に男は冷静さを取り戻しつつあった。

しかし、冷静になった男の脳裏には新たな不安が生まれつつあった。なにかモヤモヤする。

目の黒い〈コマンドウルフ〉と『アサルト』というコール・サインに、男は思い当たる節があった。

それは三年前に起きたとある事件——

〈ZOITTECゾイテック〉社のある研究機関から逃走したゾイドが、追跡した数十機のゾイドをすべて返り討ちにして行方を眩ませた。

その際、数十キロにも及ぶ爆発が観測されたのだ、逃走したゾイドが姿を変えたのだ、無責任な噂が一人歩きし、すでに事件は都市伝説と化している。

〈ZOITTEC〉はこの事実を否定し、同時期に行っていた実験による小規模な『事故』があったとだけ発表。しかし、実験の内容に関する発表は行われず、全ては人々の記憶の奥に消え、噂だけが人々の間に伝播でんぱしていった。

大概是眉唾まゆつばものの、一笑に付すような内容だったが、いくつか噂話うわさばなしに共通して出てくる内容があった――

曰く、逃走したゾイドは黒い（コマンドウルフ）だった。

曰く、逃走したゾイドのパイロットは『アサルト』のコール・サインで呼ばれていた。

曰く、逃走したゾイドには少女の亡霊が取り憑よっていた……。

これらの共通する内容から、事件に登場するゾイドに付いた渾名あだなが――〈漆黒の狂襲きやうしゆうまき姫〉。

いつしか、実在するかも知らないゾイドはそう呼ばれるようになっていた――

この事を思い出した男は再び恐慌状態となった。

一度冷静になった分、混乱はよりまともな思考を遮断する。

いま目の前にいる敵は件くだんの『亡霊ゾイド』ではないのか？

だとすれば、投降した処で命の保障などあるのか？

男は改めて噂話のゾイドの名を整わぬ呼吸で口にした。その名を唱えれば、もしや目の前の悪夢が消えるのではないかと一縷いちろうの望みを託して……。

「――し、〈漆黒の狂襲姫〉……！――」



国際法こくさいほうに則のっとった定型文を伝え終えて、アサトは相手からの応答を待った。

あまりの恐怖に気を失っていない限り、何らかの反応リアクシヨがあるはずなのだが……時計の針が半周するだけ待っても〈モルガ〉のパイロットからの応答は無かった。

再度通信を試みようとした時――

『――し、〈漆黒の狂襲姫〉……！――』

「――！――」

通信機から聴こえた搾り出すような応答にアサトは言葉を失った。

突然の応答に驚いた訳では無論ない。

その呼び名――忌み名とも言える〈ヤミヒメ〉のもうひとつの呼称……。

「……………〈ヤミヒメ〉――」



「……ん、さっさと帰って休もう。おつかれさん、クノキ、〈ヤミヒメ〉」

『おつかれさまです、マスター』

——クウウウン。

返事を返すクノキと、喉のどを鳴らす〈ヤミヒメ〉。

二人の相方の反応にどこか満ち足りたようにしばし目を閉じ、帰路に就ぞうじこうと操縦ゆうじゆ桿かんを握りなおしたその時、救難きうなん信号しごうを告げる電子音がコクピットを包んだ——

第二話

何故生きているかと問われれば、『ただなんとなく』としか答えられない。  
死ねなかったから生きている。

そう——俺は死んでいないだけだ。  
ただの死に損ない。

そんな俺が生きていると言えるのか？

——いな否。

それはただ死んでいないだけ。  
それは生きているとは言えない。

何故生きる？

何故生きねばならない？

その答えを探している。

それが俺が生きている理由だ。

だから生きる。

だから戦う。

生きる意味を探しながら、死に場所を探しながら。

それでも——



## 第二話 鋼鉄の慟哭

盗賊団の掃討そうとうを完了し、帰路に就つこうとしたその時、コクピットに救難信号s.o.sの受信を告げる電子音が響いた。

「——救難信号？」

呟くのはどことなく気怠けだるい雰囲気けだるを漂わせた青年だ。

中途半端に伸ばした黒髪と同じく黒い瞳。やや痩せ型やという以外は特に特徴のない容姿だが、逆に言えば欠点と言える部分もない。それなりに整った顔立ちと言える。

アサト・タチバナ。

それがこの青年の名前だ。

年の頃なら二十代前半だが、年齢に似つかわしくないどこか疲れたような印象がある。

「近いな。クノキ、映像拾えるか？」

『はい。映像出します』

そう応じるのはアサトの搭乗するゾイド〈ヤミヒメ〉に搭載されたサポート・ユニットであるクノキだ。

スピーカーを通して聞こえる無機質なはずの女性の機械音声マシン・ヴォイスは、しかし聴く者の気持ちを落ち着かせる響きがある。

小さな電子音と共に正面右のモニターに二十センチ四方の表示窓ウインドウが開かれ、望遠カメラが捕らえた映像を映し出す。映し出された映像にはふたつの機影。どちらもゾイドで、一方がもう一方を追い立てている。

「救難信号を出しているのは追われている〈グスタフ〉か」

〈グスタフ〉。

強固な装甲と高い積載能力を誇り、民間でも輸送用ゾイドとして広く使われているダンゴムシ型の機体だ。

対して、それを追い回しているゾイドは——

『ライブラリー照合——〈ジエノザウラー〉です』

「『Dの遺産』か……」

〈ジエノザウラー〉。

かつての〈西方大陸戦争〉において、ガイロス帝国が進めていた〈デスザウラー復活計

画)。その過程で偶然発生したティラノサウルス型ゾイドが〈ジェノザウラー〉だ。

当時、帝国・共和国ともに躍起やぶつきになって研究が進められていた〈オーガノイド・システム〉を実験的に組み込まれた本機は絶大なパワーを発揮したが、それ故に乗りこなせるパイロットは少なく、〈オーガノイド・システム〉の効果を制限して小数が生産されるにとどまった。

ちなみに本来は黒を基調にしたカラーリングが施ほどこされているが、ウインドウに映し出されている機体は発掘された『化石』を思わせる白系統のカラーリングが施されていた。

「あんなものが他にも残ってたとはな」

〈ジェノザウラー〉を愛機にしている、とある人物の顔を思い浮かべて、アサトは気分を害した。

「クノキ、どう思う?」

『〈ジェノザウラー〉の正確なスペックが記録されていないので確かなことは言えませんが、ゾイドコアの活性値が異常です。初期生産型ファースト・ロットかどうかは判りませんが、普通のゾイドではありません』

「とはいえ、ほっとく訳にもいくまい……〈ヤミヒメ〉の状況は?」

『機体には問題はありません。弾薬にも余裕があります』

「ん——〈ヤミヒメ〉! まだ行けるか?」

——ウォン!

『まだやりたりない』とでも言うように〈ヤミヒメ〉も応える。

「よし、なら行こう」

そうやって〈ヤミヒメ〉の背部に装備されたAZ二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キヤノンの照準を追いかけつこドッグファイトをしている二体のゾイドの中間に定め、引き金を引いた。

照準どおりに、威嚇いかくを兼ねた牽制けんせいの砲撃が〈ジェノザウラー〉の眼前に着弾する。

〈ヤミヒメ〉の存在に気づいた〈ジェノザウラー〉が動きを止め、徐々に〈グスタフ〉との距離が開いていく。

「クノキ、通信を」

『了解——どうぞ』

「その〈グスタフ〉、聞こえるか? こちらは〈クスノセ機獣派遣事務所 所属の『アサルト』。黒い〈コマンドウルフ〉で援護する」

国際法に則った定型文を告げると、〈グスタフ〉のパイロットからも応答があった。

『——こ、こちら〈Z O I T E C〉所属の〈グスタフ301〉。救援に感謝する！』

多少ノイズ混じりだが、音声のみの通信からはパイロットであろう男性の安堵の表情が窺えた。

「なんで追われている？」

『……判らない、突然現れて襲ってきたんだ！』

男の必死の形相がアサトの目に浮かぶ。

「……了解した。この先にミヤコノ・シティという街がある。そこに逃げ込め」

そう言つてアサトは〈グスタフ〉のパイロットの札を聞きつつ、動きを見せない白いテイラノサウルス型へ意識を集中させる。

「〈ジェノザウラー〉は応答なしか」

『通信回線が繋がりません。話を聞くつもりはないのでしょうか』

「ま、期待はしてなかったさ。〈グスタフ〉を追う気配はないが……なにが目的だ」

盗賊の類であれば邪魔者を消して、すぐにでも獲物を追いたい処だろうが、そんな動きを見せる様子はない。

〈グスタフ〉が去った方向へ目を向ければ、すでにその姿はだいぶ小さくなっていて。走行に支障が出るような損傷はなかったのだろう。

「さて、どうするかな……」

記録されているスペックだけを見ても白兵戦は避けたいと思わせるが、何よりも気になったのは『荷電粒子砲』の存在だ。

恐らくはゾイドが単体で運用する火器としては最大の威力を持つであろう兵器。対峙している白い機体が実装しているかは不明だが、発射までに要する時間が判らない以上うかつに近づくのはためらわれた。

「……ん、接近戦は避けて距離を取る。適当に時間を稼いで、頃合を見て逃げるぞ」

『賢明な判断です』

アサトの作戦に賛成するクノキだが、〈ヤミヒメ〉だけは不満げに喉を鳴らす。

「そう言うな。あんなのとやり合うような武装は今日は積んじやないんだ」

そう。今回の仕事は〈モルガ〉の掃討であり、イレギュラーに対応できるような装備はない。

「だいたい、〈カッチ〉を壊したのはお前だぞ。あれならなんとかなったかもしれない」  
なおも食い下がる愛機に駄目押しするように、多少恨みがましいニュアンスを込めて告げると、さすがにぐうの音もでないのか引き下がる〈ヤミヒメ〉。

「また次の機会にな」

苦笑しつつ相方にフオローを入れると、操縦桿そうじゆうかんを握りなおしアサトは正面の敵を見据みすえた。

「さて、どう来る？」



「——見つけた……」

白い〈ジェノザウラー〉のコクピットで、自分と対峙する黒いコマンドウルフ・タイプ——〈ヤミヒメ〉を見ながら『彼女』はそう呟いた。

そこに居たのは、年の頃なら十二、三歳の少女だった。

鮮血を思わせる紅い髪と瞳。

その決して人間には出るのはない紅い色が、透けるような白い肌とのコントラストで目に痛い位に良く映える。

小柄な体格に細い手足。その多分に幼い少女特有の身体の未成熟さには、ある種の美しさがあった。芸術的と言ってもいい。

整った愛らしい顔には、どこか蠱惑的こわくとも言える表情を浮かべている。

私には欲しいものがある。

私だけを見てくれる、私だけのパートナー。

ずっと探していたもの。

ずっと欲しかったもの。

もうすぐ手に入る。

私だけの……。

「もうすぐだよ、〈シラヒメ〉……」

そう言っ、少女は外見からは不釣り合いとも思えるどこか恍惚いろうこつとした表情を浮かべながら、モニターに映る〈ヤミヒメ〉のコクピット、その奥に居るであろうパイロットを想う。

——オオオオオオオオン……。

少女の呼びかけに応えるように〈シラヒメ〉と呼ばれた白い〈ジェノザウラー〉は低く

唸り声を上げる。

「ふふふ……お前も早く逢いたいよね。じゃあ行くか、〈シラヒメ〉」

妖しくも——しかし年相応の無邪気な笑みを少女が浮かべた次の瞬間——〈シラヒメ〉のkokopittoから少女の姿は淡い紅い光になって消えた。



変化は突然現れた。

白い〈ジェノザウラー〉の眼が発光したかと思えば、次の瞬間には全身の装甲と装甲のパネルラインつなぎ目から紅い光が漏れ出した。心臓の鼓動のように光を明滅させる姿は全身から血を流している様にも見える。

そして〈ヤミヒメ〉を睨み付けると、出血の痛みから自分を鼓舞するように〈ジェノザウラー〉は咆哮を上げた。

——グオオッ！

「——！なんだ……この感覚!？」

アサトが違和感を感じた瞬間、同時に〈ヤミヒメ〉のいくつかのプログラムが勝手に起動を始めた。

(まさか、〈DFC〉が共鳴したのか?)

『〈DFC〉、スタンバイ。パイロットノ承認ヲ要請シマス』

そう告げるクノキの声には、普段のようなアサトを気遣う温度はなく、無機質な機械音声のそれではなかった。

「どうしたクノキ、しつかりしろ！」

『パイロットノ承認ガ確認サレマセンデシタ。プロセスヲ中断。システムヲ再起動シマス』

「こんな時に……」

システムの再起動時、一度シャットダウンしたシステムが再度立ち上がるまでゾイドはパイロットから一切の指示を受け付けない。しかも敵を目の前にしながらこの状況は、手足を縛られているのも同然だ。

こちらの状況を知ってか知らずか、脚部の装甲を展開し、スラスターを露出させる〈ジェノザウラー〉。機体を浮かせる程の出力によりホバー走行に移行し、一気に〈ヤミヒメ〉に肉薄する。

距離にして残りわずか五メートル。

システムは未だ復旧していない。

残り一メートル。

白いティラノサウルス型が腕部のツメを振り上げる。

〈ヤミヒメ〉はまだ動けない。

(ここまでか………割と早かったな)

アサトはその状況を他人事ひとごとの様に感じていた。

死がそこまで迫る。だが恐怖はない。

むしろ不思議と落ち着いてさえた。

(これで何もかも終わりだ……)

次に来るであろう衝撃に目を閉じて、死を受け入れようとした時――

『×××××』

アサトの脳裏に、こちらを振り返りながら薄く微笑む、紅い髪と瞳の少女の姿がよぎる。なにごとか口になっているが、その声を聴き取る事は出来ない。

「……！」

まだ死ねない――そう思い返して、無駄だと知りつつ、それでも操縦桿そうじゆうかんを握りしめる。

そして、次に来るはずの衝撃は――来なかった。

直上から振り下ろされた〈ジェノザウラー〉のハイパー・キラー・フローツメを、〈ヤミヒメ〉は首を左に振って紙一重で回避。続けて、勢いを乗せた尻尾しっぽによる殴打おうちが迫る。

だが〈ヤミヒメ〉はこれを避けず、受身を取りつつ跳ね飛ばされる力を利用して〈ジェノザウラー〉との距離を取った。

その際、空中で身をひねり一回転。相手を正面に捕らえつつ軽やかに着地した。

「……………」

〈ヤミヒメ〉の挙動に驚いたような反応を見せる〈ジェノザウラー〉だが、もつと驚いていたのは当のアサトである。

『――〈ヤミヒメ〉の自己防衛本能』

「！ クノキ………今のはお前か？」

アサトは何もしていない。ただ想っただけだ――『動け』と。

『いいえ。今のはゾイドが持つ本能――〈ヤミヒメ〉の意思です』

「……そうか。ゾイドにとつての一番の足枷あしかせは、人間なのかもな………」

そもそもゾイドとは人間が捕獲し、操縦席を設け、武装を施したものだ。そこにゾイドの自由意思が介入する余地はない。

自由を奪ったことを恨まれ、人間という異物に支配される事を疎ましく思っているもな  
んら不思議はない。

アサトはそう考える事があった。

しかし――

『それは違います』

クノキの、心なしか熱のこもった声にアサトの言葉は否定された。

『自分たちは兵器ではない。身体を改造されても、心までは兵器になれない。だから自分  
の事を理解してくれる乗り手と出逢えることは幸せだ』

「……………」

アサトは呆けたようにクノキの言葉を聞いていた。

『〈ヤミヒメ〉はそう感じています。そして、それは私も同じです』

アサトは以前に読んだ文献の一節を思い出していた。あれは誰の言葉だったか――

ゾイドはヒトを感じる。乗り手が望めばゾイドはそれに応えてくれる。

だから楽しい。

だからゾイド乗りはやめられない。

(……そうだったな。だから俺は〈ヤミヒメ〉に乗っている)

それはゾイド乗りにとって最も原初的な感情であり、だからこそ忘れがちになっ  
てしま  
う事だった。

「――クノキ、もう大丈夫なんだな」

『はい。ご心配をおかけしました、マスター』

クノキの声を聞き、普段どおりだとアサトは確信する。

「なら、少し本気出そうか。プラン変更だ――クノキ、〈DFC〉限定起動」

『了解。第一段階、制限解除』

アサトの要請に従い、クノキによるプログラムのリミッター解除が行われる。

そして、先の〈ジェノザウラー〉の異変と同様の現象が〈ヤミヒメ〉にも起こった。

キャノピーの奥にある双眸を妖しく光らせ、機体の各所からも紅い輝きが漏れ始める。  
その光は黒い機体色のせい、白い〈ジェノザウラー〉より一層強く深紅の輝きを増し  
ている様に見える。





期待を込めたアサトの眩くらきは、しかし着弾の煙の中から現れた無傷の敵機の姿によって裏切られた。

「……クノキ、あんな装甲があるのか？」

『着弾の瞬間に目標付近に高エネルギー反応が感知されました。恐らくEシールドを使用したと思われます』

主の質問に明瞭な回答を返すクノキ。

「やっかいだな」

Eシールド自体は特に珍しい技術ではない。装備している機種はそう多くはないが——光学兵器と同じく機体に掛かる負担が大きいため、搭載できるゾイドは限られている——ある種のエネルギーによって形成される障壁は絶大な防御力を発揮する。

だが、砲弾を防いだという事は当たればそれなりのダメージを受けるという事だ。

時計に目をやると、〈グスタフ〉を見送ってから十分な時間が経過していた。

「頃合だな。仕掛けるぞ」

『撤退ではないのですか？』

「プラン変更って言ったろ。それに荷電粒子砲は潰しておきたい」

撤退した処ところを後ろから狙われる可能性もある。未だ装備の有無は確認できない——〈ジェノザウラー〉の荷電粒子砲の砲身は口腔内くわうくわうに収納されているため発射体勢を取るまで外部から視認できない——が、危険要素は潰しておきたい。

『了解しました』

アサトの考えを酌くみ取ったクノキは即座に同意する。

「——〈ヤミヒメ〉！」

その呼びかけに短い咆哮で応え、漆黒の機体が駆ける。

アンカーの様に射出された、ワイヤーで上腕と繋がった〈ジェノザウラー〉の右腕を寸での処で右に回避し、加速の勢いで横滑りしながらホーミング・レーザーと二連装キャノンを斉射する。

しかし、頭部に殺到した攻撃は全てEシールドに阻まれ無効化されてしまった。

「この距離でも駄目か……ならッ！」

更に速度を上げて敵に肉薄する〈ヤミヒメ〉。

迎撃に打ち込まれた——今度は左側——ワイヤー・アンカーを真上に跳躍して避け、ワイヤーの線上に着地する。

射出したアンカーを巻き取る最中だった〈シラヒメ〉は逆にワイヤーに引っ張られ、前のめりに体勢を崩す。

なんとか姿勢を保とうともかく敵機に、眼前にまで迫った〈ヤミヒメ〉に対応する術はなかった。

ワイヤーを踏みつけて相手の動きを封じた〈ヤミヒメ〉は、背部の二連装キャノンの一門を〈ジェノザウラー〉の口腔内に突き入れ――

「――クノキ！」

『連続発射』

アサトの意図を読み取り、射撃モードを切り替える。

「全弾もつていけ！」

操縦桿の引き金を引くと共に、弾倉内の全ての砲弾が〈ジェノザウラー〉の口内に飲み込まれていく。

爆発と同時に後方へ飛び、距離を取る〈ヤミヒメ〉。

見れば、さすがに零距离での連続発射には耐えられなかったようだ。二連装キャノンの左側の砲身が半ばから破裂していた。

一方の〈ジェノザウラー〉は……動きを停止して口内からもくもくと煙を吐き出してはいるものの、頭部自体は健在だった。

「……頑丈だな。だが荷電粒子砲は撃てないだろう――撤退するぞ」

今ならとどめをさせるかもしれないが、無駄な戦闘行為を行うほどアサトは血気盛んではなかった。

一刻も早くこの場を離れようと〈ジェノザウラー〉に背を向けた時――

――グオギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

突然活動を再開した〈ジェノザウラー〉が断末魔の叫びにも似た咆哮を上げ、残った右のワイヤー・アンカーを〈ヤミヒメ〉に向けて射出した。

すでに〈DFC〉を待機モードにしていた〈ヤミヒメ〉は一瞬反応が遅れた。

アンカーは〈ヤミヒメ〉の右前脚の肩部装甲を掴み、そのまま力任せにワイヤーを巻き戻す。

〈ジェノザウラー〉の右眼はすでに光を失っており、左の眼だけに爛々と光を宿していた。

狂気を孕んだ隻眼で〈ヤミヒメ〉を見据えている。

先ほどまで全身から漏れ出ていた紅い光は、〈ヤミヒメ〉同様消えていた。

踏ん張りきれずに〈ヤミヒメ〉は横倒しになり、右側面を地面に引きずらせながら徐々に

に〈ジエノザウラー〉に引き寄せられていく。

「この——乙女の柔肌やわはだにッ！」

アサトはキャノンを旋回させ、残った右側の砲身で間近に迫った白い〈ジエノザウラー〉の頭部に照準をつけ、薬室チャンバーに装填済みだった最後の砲弾を発射した。

———!?

驚く間こそあれ、避ける距離も——ましてEシールドを展開する余力もない〈ジエノザウラー〉は左側頭部に直撃を受け、今度こそ沈黙した。

「……よし、離脱する……〈ヤミヒメ〉、もうひとがんばり頼む」

——ウウウ……ウオオオオオオオオオオオンッ！

力を振り絞り立ち上がった漆黒のオオカミは自分を鼓舞するように一鳴きすると、すでに力を失いながらも肩に組み付いたままのワイヤー・アンカーを忌々しげに払い落とした。

「いい子だ……それじゃあ、今度こそ帰ろう」

主あるじの賛辞に気を良くした〈ヤミヒメ〉は、さっきまでの戦闘などなかったかのように意気揚々と駆け出した。

すでに周囲は夕方から夜へと変わろうという時刻になっていた。

アサトがぼんやりと、空に浮かぶ二つの月を見上げていると——

『マスター、街まで時間があります。少しお休みください』

クノキの申し出に、アサトは自分がうとうとしている事に気がついた。

「……ん。そうさせてもらうわ」

『はい。おつかれさまです、マスター』

聞き慣れた——耳に心地いい、落ち着いた声のアサトを労う。

「……クノキ」

ふと思いついたように言葉が出た。

『はい』

クノキも自然と応じる。

「……いや、なんでもない」

『……はい、マスター』

第三話

『健全な精神は健全な肉体に宿る』という言葉がある。

広くは、からだ身体を鍛えれば精神も健康になる——と都合よく解釈され使用されているが、実際は古い詩の一節である。

だがもしこの解釈が真理であるなら、いびつ歪な身体を与えられたわたしが、こころ歪な精神しか持てないのも道理だろう。

わたしの精神は身体と同様に歪んでいる。

そうでなければ、あなたを好きになるはずがない。

こんな感情はわたしには許されない。

歪な身体と歪な精神。

届かぬ想いと叶わぬ願い。

いや、そんなものは言い訳だ。

そう考えて自分を納得させたいだけなのだ。

だって、わたしの願いは叶うはずがないのだから。

あなたの中には彼女が居て。

そこにわたしが入り込む余地など最初から無い。

いや、それもまた言い訳だ。

ただ自分が傷つくのが怖いだけ。

あなたに拒絶されたら、わたしはもう生きていけないから。

きっと死んでしまいたいくらいに自分が嫌いになるから。

それでもわたしは——あなたが好きです。

この気持ちはもう止められない。

## 第二話 その日、クスノセ機獣派遣事務所

都市、ミヤコノ・シテイ。

かつては名前の通り『都』<sup>みやこ</sup>が置かれており——東方大陸の政治・経済の中心だったが、約半世紀前の〈大戦〉による被害を受け、現在はベルタ・シテイに遷都されている——名前はその名残<sup>なごり</sup>である。

多くのヒトで賑わいを見せるシテイの中心部から離れた、廃工場跡などの空き地が目立つ、極端に人気の少ない区画にその建物はあった。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉——そう書かれた来客用の入り口の看板の下には、『ゾイドが入り用のお仕事、お引き受けします』と書かれている。

特に古くも新しくもない、三階建ての一軒家という感じだ。来客用の入り口から見れば何かの事務所に見えなくもない。

その建物の二階の一室にて眠る青年が居た。

やや長めの黒髪と黒い瞳——今は閉じているが——で特に美形という訳ではないが、それなりに整った顔つきをしている。

アサト・タチバナ。

それがこの青年の名前だ。年の頃なら二十代前半。やや痩せ<sup>や</sup>型の体躯と不健康気味の顔色が特徴だが、特に病的といった印象は無い。

時刻は昼を回っており、まっとうな人間なら勤務先なり教育機関に向いている筈<sup>はず</sup>だが……起きる様子は見られない。

そこへ——

「アサト？ 入りますよ？」

こんこんとノックの後、反応が無いのを確認して声の主が部屋へ入室してきた。

アサトと同じ黒髪と黒瞳の娘である——といっても二人に血縁関係は無く、東方大陸ではもつとも一般的な組み合わせである。

胸元まである豊かな黒髪は手入れが行き届いており、アサトの無頓着<sup>むとんちゃく</sup>なそれとは比べるべくもない。美人ではあるが積極的に訴えかける様な派手さは皆無で、しかし気付けば目で追ってしまう様な、控えめで清楚な印象が強い。

「アサト。いい加減に起きないと、またカスミちゃんにダメ人間って言われちゃいますよ？」

そう言いながら黒髪の娘がアサトの身体からだを揺するも、一向に目を覚ます気配は無い。  
「困りましたねえ」

言葉に反して特に困った表情を浮かべるでもなく——むしろ穏やかな微笑のまま——娘はアサトの耳元に顔を近づけ……。

「起きないと……キス、しちやいますよ」

「——ッ！」

官能的な響きすらこもった、囁ささやく様な口調に、アサトの意識は瞬時に覚醒した。

しかし——

——ごん、というにふい音と共に、覚醒したアサトの意識は額ひたいの鈍痛と共に一時機能を停止した。

「~~~~~とおおお……」

額の痛みに唸うなりながら視線を右にずらせば、自分と同じように額を押さえてうづくまる娘の姿があった。

「……………おはよう……所長」

「……………はい……………おはようございます」

額をぶつけた相手を半目で見やるアサトと、涙目になりつつも微笑を浮かべたまま——恐らくこれが地なのだろう——返事を返す『所長』と呼ばれた娘。

娘の名前はハルカ・クスノセ。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長にして、そこに所属するアサトの上司である。

「……………たく、性質カタチの悪い冗談はやめると言ったはずだが」

「急に跳ね起きると思いませんでしたので。それに起きないアサトが悪いんです。照れなくてもいいんですよ?」

「嫌がつてるという発想はないのか」

「大丈夫ですよ。ちゃんとお姉さんが教えてあげますから」

安眠を妨げられた恨みを抗議する低血圧不健全男と、それを受け流す微笑の黒髪美人。見た目、年齢不詳のハルカだが、実際アサトより二つ年上なのである。

「なにがお姉さんだ……」

「あら、なにか言いたい事でもあるんですか?」

「いんや、別に」

不毛な言い争いに飽きたのか、もしくは眠気が完全に取れてしまったのか——恐らくはその両方だろう——観念して、ベッドを降りるアサト。

「早く着替えて来てくださいね。愛いとしのお姫様が帰ってきちゃいますよ」

「……そうか、〈ヤミヒメ〉がオーバーホールから帰ってくるんだったな」

「そうですよ。自分の考案したプランが実装されて来るっていうんで、カスミちゃんも朝からそわそわしてるんですから」

そう告げて部屋を出ようと扉に手を掛けて、アサトに背を向けたままハルカは思いついたように続けた。

「——アサト。わたしがもし……」

「んー？」

上着を着替えつつ、投げやりに相槌あいつちを返すアサト。

「いえ——すみません、なんでもありません」

思い詰めていた事をこまかす様に普段の調子に戻り、部屋を後にするハルカ。

「……………」

閉じられた扉を見つめて、後を追うべきかしばし黙考してアサトは着替えを再開した。



白い〈ジェノザウラー〉との遭遇戦から約一週間。〈ヤミヒメ〉は定期検査の時期でもあり、傷ついた外装の修復やシステム・チェックも兼ねてオーバーホールに出されていた。

通常のオーバーホールだけなら三日もあれば完了するが、今回は新装備の実装と調整も行うため、事務所は事実上、開店休業中である。そうでなくてもアサト・タチバナが規則正しく寝起きする事は稀まれだが……。

顔を洗い、身だしなみもそこそこに——『しゃんとすればそれなりにいい男なのに』とはハルカの弁である——ダイニング・ルームに行くと二人の姿があった。一人はこの事務所事務所の所長——つい今しがたアサトを起こしに来たハルカである。そして彼女とテーブルを挟はさんだ対面たいめんには少女が座っていた。

アッシュェプロンド  
灰色がかつた銀髪に、同じく灰色がかつた黒い瞳。東方大陸ではあまり見ない色の組み合わせだが——父親が他大陸の出身らしいが、詳しい事はアサトは聞いていない——小柄な少女にはよく似合っていた。彼女が先程のアサトとハルカの会話に出ていた『カスミ』だ。

カスミ・シノザキ。

年齢は十六歳だと聞いているが、一見ただけではもっと幼く見える。

ハルカもカスミもかなりの器量良しで『美人』の一語で事足りるが、その雰囲気はまるで正反対だ。二人とも『動』と『静』で言うなら『静』だが、ハルカを太陽に例えるなら



カスミは月と行った処か。

「おはよう、カスミ」

「……お昼過ぎに『おはよう』もない気がしますが」

あくび混じりのアサトの挨拶あいさつににべもなく応える少女——カスミ。

こちらを振り向いた際に、肩に掛かるか掛からない位の長さのショートボブがさらりと流れる。たださえ感情の起伏が少ない上に、やや長めの前髪に隠れて表情はよく判らない。

「……『そわそわ』ねえ」

カスミがここへクスノセ機獣派遣事務所きじゅうはいせんじむしょに事務員として働くようになってから約半年になるが、この無口な少女の心情はアサトにはいまいち掴みきれない。

「……なんですか」

アサトの無言をどう思ったか、居心地悪そうに身をよじるカスミ。無口というよりは単にコミュニケーションが苦手なだけなのだろう。

「ん、なんでもない。ハルカ、俺もコーヒー頼む」

「はい。ちよつと待ってくださいね」

言うが早いか、キッチン・ルームに向かう事務所の最高責任者。

「あ——ハルカさん、私やりますから」

「いいんですよ。手、痛むでしょう？」

そう言つて立ち上がりとうとするカスミを制してコーヒー・メーカーを操作するハルカを横目に見つつ——いわゆるシステムキッチンになっている——カスミの手元を見ると、右

手の袖口そでぐちから包帯ガーゼが見えた。

「右手、どうかしたのか？」

「あ……これは、その……」

咄嗟とつさに右手を隠して答えに窮きゆうする少女。

「ぼーっとしていて、ヤカンで火傷やけどしちゃったんですよ」

コーヒーを持って現れたハルカは苦笑しながら付け加える。

「いつも冷静なカスミちゃんが珍しいでしょうか？」

確かに、少なくともアサトは彼女がぼーっとしている姿を見たことがない。もともと理由は見当がつくが。

「それだけ気になるってことだろ」

それ以上は突っ込まずに、ハルカから受け取ったコーヒーに角砂糖を一つ二つと投入していくアサト。

「……砂糖、入れすぎです」

五つ目の角砂糖を入れた処でカスミから物言いが入った。その表情はすでに普段の無表情なものに戻っている。

「苦いコーヒーなんぞ飲めるか」

彼女の物言いには取り合わず、更に二つの角砂糖とミルクを入れて掻き混ぜる。相当な甘党である。

「……コーヒーに対する冒流です」

そう言つて自分の手元のコーヒーを飲むカスミ。こちらは砂糖もミルクも入れないブラックである。

そんなやり取りをにこにこしながら眺めるハルカはミルクのみという——自称・穩健派である。別に派閥争いをしてはいる訳ではないのだが。

これが〈クスノセ機獣派遣事務所〉の主なメンバーの日常である。



アサトの起床から約一時間。まったりとした空気に電話の呼び出し音が響いた。

「——はい、お電話ありがとうございます。〈クスノセ機獣派遣事務所〉、所長のクスノセです」

特に誰が出て問題はないのだが、事務所にかかつて来る電話は十中八九仕事の依頼なので、電話にはハルカが出るのが定例となっている。

「はい、ではお待ちしております」

電話の受話器を置き、一同——と言つても二人だが——を振り返る所長。

「ムラサメ・ファクトリーからです。間もなくこちらに到着するそうですよ」

ムラサメ・ファクトリーはアサト達が鼻屑ひじきにしているメーカーのひとつで、ゾイドのメンテナンスから関連部品の製造・組み立てまで一手に請け負う大手企業だ。惑星Ziを二分する〈ZOITEC〉社のグループ企業でもある。

「そんなじゃ、〈ヤミヒメ〉を迎えに行こうか」

二杯目のコーヒーの残りを飲み干し、腰を上げたアサトにハルカとカスミが続く。

一同が目指すのは事務所兼住居けんである本部棟——今までアサト達が居た建物——と同じ敷地内にある格納庫、通称『ハンガー』である。

ちよつとした体育館ほどの規模で、中型ゾイドを格納するには十分すぎる広さを誇つて

いる。ついでに言えば人気の少ない——人通りが少ないため人目に付きにくい——場所に事務所を構えているのも、このハンガーがあるためだ。

アサトは手馴れた手つきでハンガー入り口のパネルを操作し、搬入用シャッターを開く。内部には天井を移動するタイプのクレーンや重物を運ぶためのキャリアー、所々にはジャンク・パーツや工具の類が整理されて置かれている。

「〈ヤミヒメ〉が居ないだけで、ずいぶんと寂しくなるもんだな」

『そこにあるべきものが無い』——そんな空気がハンガーの中には漂ただよっていた。

『そうですねえ。何かを『格納』するからこそその格納庫ですから』

相槌あいづちをうちながら、なぜかアサトの背後にしな垂れかかるハルカ。

「その寂しい心のスキマ、わたしが埋めて差し上げましょうか？」

背後からアサトの首に両腕を回し、抱きつく様にして耳元でささやくハルカ。普通の男なら思わずどきどきとしそうなシチュエーションだが——

「結構だ……くつつくな、鬱陶うつとうしい」

あせ焦るでもなく、しかし邪険あせにするでもなく淡々と言いつつアサト。

「つれないですねえ」

「うつさこ」

そんなやり取りを呆あきれた様子で見守る人物がひとり——当然、同行してきたカスミである。

ここ——〈クスノセ機獣派遣事務所〉に来て約半年。最初は驚いたものだが、今ではこの光景も見慣れたものである。

（ハルカさんは明らかにアサトさんに好意をもっている。アサトさんもそれは気付いているはず。だけど二人は恋人という訳じゃない）

ここに来てすぐの頃、ハルカの口からそれは聞かされている。

（ただの所長と従業員……それだけじゃない。友達というのも少し違う気がする。男と女だからって恋愛関係しかないとは思わないけど……）

人生経験——こと、色恋沙汰ざたに関して言えば絶対的に経験値が足りないカスミは、この二人の関係性がいまいち掴つかみきれずにいた。

そこへ——

「お？ 来たか」

ハルカを引き剥はがしつつ振り返るアサトの向く方向に目を向ければ、トレーラーが一台向かってくるのが見えた。連絡のあったムラサメ・ファクトリーのものだ。

ハンガー内に停車したトレーラーから降車してきた職員の手紙にハルカがサインをする

と、アサトは早速トレーラーの貨物庫を開けてもらう。そこには一週間ぶりに逢う愛機が居た。

漆黒のカラーリングが施されたオオカミのシルエットを持つゾイド——〈ヤミヒメ〉だ。通常のコマンドウルフ・タイプと仕様が違っているのは色と、スモーク・デイスチャージャーの代わりに両腰に張り出している一対のブレード状の突起——ハイブリッド・スラスター・バインダーの存在だろう。仔細に観察すれば右首のプレート状の飾りや、左首の傷も確認できる。

アサトがコクピットのある頭部に近づくと、〈ヤミヒメ〉は主人に頭を撫でてもらうとする犬のように姿勢を低くし、顔をすり寄せてきた。

「——おかえり、〈ヤミヒメ〉」

そう言いながら愛機の装甲を撫でてやると、〈ヤミヒメ〉は気持ちよさげに喉を鳴らしてキャノピーを開いた。

アサトがコクピットに搭乗すると、それを認識したようにモニターを始めとしたシステムが起動を始めた。

『搭乗者のバイタル・サインを確認。全システム正常に起動——おはようございます、マスター』

スピーカーから聴こえてくる、聴き慣れた女性を思わせる機械音声にアサトは優しく返事を返す。

「ああ、おはようクノキ」

クノキ——それは〈ヤミヒメ〉に搭載されているサポート・ユニットであり、有り体に言えば人工知能のようなものである。

「もう昼過ぎだけだな」

『大方、貴方がカスミに言われたんじゃないですか？』

ここに技術者の類が居れば驚愕しただろう。ここまで柔軟なコミュニケーションが可能な人工知能などあるはずがないからだ。

「ご明察。さ——外に出ようか」

『了解』

機体を貨物庫から出すとその全容がようやく把握できた。

先程の特徴以外にも一般的な〈コマンドウルフ〉との差異が確認できる——背部の武装だ。

しかも左はライフル、右は大振りの『剣』がアタッチメントを介して左右非対称のシルエットを構成している。

「どうだ、感想は？」

〈ヤミヒメ〉のキャノピーを開け、無心に——いや、感極まって声が出ないのだろう——愛機を見上げている少女に、アサトは声を掛けた。

「——あ、はい……すごくいいと思います……」

カスミは上手く言葉がまとまらず、思ったままを口にした。

「それは結構。それじゃあ試してみるか」

カスミの感想を確認すると再びキャノピーを閉じ、アサトはハンガーの外へ愛機を進ませた。



新装備のテストは良好だった。

射撃も接近戦もそつなくこなせる汎用性にアサトは満足し、〈ヤミヒメ〉は近接戦闘用の試作兵器〈カグツチ〉——以前の戦闘で破損した〈カヅチ〉を改修したもの——がいたく気に入ったようで、あとはアサトに合わせて微調整を済ませるだけでテストは完了した。

時刻は夜。〈クスノセ機獣派遣事務所〉のメンバーは夕食を兼ねたちよとした宴会状態だった。

「それでは——〈ヤミヒメ〉の全快とカスミちゃんのプランの成功を祝して乾杯——い！」

ハルカが乾杯の音頭を取り、宴が開始された。

そもそも、〈ヤミヒメ〉の新装備開発にあたって決め手となったのがカスミのアイデアである。ムラサメ・ファクトリーから提供される〈カグツチ〉を、如何に機体のバランスを崩すことなく装備できるか。

出力は〈DFC〉を備えているため問題ではなかったが、問題は単純にどう配置し、飛び道具はどうするかだった。

そこへ前回の戦闘で破損したAZ二連装二五〇ミリ・ロング・レンジ・キャノン<sup>い</sup>を改修した『二五〇ミリ改』と、これらを〈ヤミヒメ〉本体に設置するためのアタッチメントの設計図をカスミが提出したのだった。

「〈レッドホーン〉等の重量級ならまだしも、高速戦闘をするゾイドに左右非対称の装備とは考えませんでしたねえ」

「ん、左右の武装で重心が変わるから、普通はやらないわな。まさに『コロンプスのエッグ・スタンド』か」

「……それ、立ちやすいです」

などと他愛も無い会話をする年長者一人と未成年が一人。ちなみにアルコールはない。道徳を重んじている訳ではないが、カスミには背伸びをする趣味も無く、アサトは全く酒が飲めない。

そんな訳で唯一まともに酒が飲めるハルカは自重し、ノンアルコールのビールを飲んでいた。

ノンアルコールなので酔うはずは無いのだが……。

「——んふふ、あ・さ・とお」

料理も食べ終わり、そろそろ片付けを始めようとした頃……異変は起こった。酔う筈の無い飲み物で酔っ払っている黒髪美人がひとり——居た。

「ねえ、わたしのことお、きらいですかあ？ ぬふふ、ねえ、あさど」

「離れる——酔っ払い」

押し倒す様に迫ってくるハルカをなんとか防ぎながらアサトが言った。

「だれがあ、よっぱらってるんですかあ？ こまかさないてください」

普段の清楚な装いからは想像もつかないハルカの豹変ひょうへん振りに、カスミは言葉なを失くしていた。ハルカの顔はほのかに朱色に染まり、とろんとさせた瞳はわずかに潤んでいる。

「……よくもまあ、ノンアルコールでこうも見事に酔っ払えるもんだ」

「え、これ……酔ってるんですか？」

正面から首に手を回して迫ってくるハルカを抑えるアサトと、それを見て驚愕するカスミ。  
……。

「酒は飲めるが弱いんだよ、こいつは。……ハルカ、しっかりしろ」

「……わたしじゃ、ダメですかあ？ ……んう」

アサトは、猫のように自分の胸元に顔をすり寄せ、そのまま寝入ってしまったハルカを抱き上げた。

「部屋に送っていくから、片付けは明日にしてもう休んでいいぞ」

「……わかりました。あ——お水持っていきます」

「ん、頼む」



本部棟の二階——たった今まで食事をしてきたダイニング・ルームとアサトの個室も同じフロアにある——のハルカの個室に辿り着く。扉を開け、ベッドに部屋の主を寝かせるアサト。

住人の性格を表したような部屋だ。雑多な感じはなく、それでいて殺風景でもない。調度品には白を基調としたものが多く、清潔感がある。

壁のボードにはたくさんの写真が貼ってあり、アサトと出会ったばかりの頃のものもある。迷惑そうなアサトの腕に、自分の腕を絡ませて笑っているハルカの姿は本当に楽しそうだ。そんな写真を見つけて苦笑し、部屋を出ようとしたが、何かがアサトのシャツの裾を掴んでいるのに気がついた。

ハルカの細い腕がアサトを行かせまいと裾を握っていた。

「何だ、目が覚めたのか？」

アサトが振り返る。

一方、ハルカは俯うつむいていて顔が見えない。

「……きです……」

「あ？」

眩こぼやく様なハルカの声がアサトは聞き取れなかった。

「好きです！ あなたのことが……！！」

「……………」

アサトは驚かない。そんなことはとづくに知っているから。

「……わたしが男だからですか？」

顔を伏せたまま、かけられたシーツの間から腕だけを出してアサトを引き止めるハルカ。

「ハルカ——」

「——わかってるんです。そんな事じゃないだって。けど、わたしまだ酔ってるみたいで……そんな風ふうに思っちゃうんです」

アサトの言葉を遮さへって続ける。

「……わたしじゃ、クノキさんの代わりになれませんか？」

言葉がわずかに震えている。表情は見えないが、先程のような妖艶な響しんしきは無い。真摯しんしな、それでいて拒絶される事を恐れている口調だ。

——そう、ハルカ・クスノセは男である。

先天的なホルモン・バランスの異常で女性的な外見をしているが、生物学的には男性なのである。

しかし精神は肉体に引っぱられるものなのか、物心つくころには彼女——正確には『彼』と言うべきか——は女性として振る舞うようになり、それ故か自分・他人を問わず『男女』

というものの区別がハルカには希薄になっていた。

そういった意味では彼女の『好き』というのは真実の愛と呼べるかもしれない。

「……………」

アサトは無言——いや、どう応えていいか判らなかつた。

自分は誰かに好かれるような人間ではない。

自分にはそんな資格が無い。

そう思っていたから。

……………」

沈黙だけが場を支配する。

やがてハルカがゆつくりと口を開いた。

「……………すみません、困らせてしまいましたね。もう落ち着きましたから——カスミちゃんも、驚いたでしょう?」

いつから居たのか、開放したままのドアの入り口に水を運んできたカスミが立っていた。

「……………あ、あの……………驚きました、けど、その……………」

単純に動転しているのだろう。しどろもどろになっているが、その表情に嫌悪や奇異の色は無いのに安心してアサトが助け舟を出す。

「——水、持ってきてくれたんだろ?」

「……………あ、はいっ」

我に返ってトレーに乗せたコップを手渡すカスミ。

「ありがとうございます。本当にもう落ち着きました。いけませんね、お酒は自重しないと」

そう言つて水の札を言うハルカに——

「……………私は、そんな事でハルカさんの事を愛な目で見たり、嫌いになつたりしませんから」カスミの言葉に不意打ちを喰らつたように一瞬ぼかんとした後、そつと彼女の頭をなでるハルカと恥ずかしげに顔を伏せるカスミ。

「ありがとうございます。カスミちゃん」

こうして見ると歳の離れた姉妹に見える。

「そんなじゃあ、もう行くぞ。おやすみ」

「おやすみない、ハルカさん」

アサトに続いて、名残惜しげにカスミも部屋を出ようとする。

「——アサト」



ハルカがアサトへ呼びかけた。

「ん？」

「答え、待っててもいいですか？」

普段と変わらぬ微笑で。

「好きでいても——いいですか……？」

期待はしていませんから——そんな風にも見える表情で。

「……好きにしろ」

少し困った様に苦笑で返し、アサトは扉を閉めた。

「——驚いただろう？」

ハルカの部屋を出たアサトは一息つくくと、カスミに視線を向ける。

「……さつき言ったとおりです。驚きましたけど、それだけです。他人から拒絶される辛

さは、少しは解かるつもりです」

そう答えた少女の顔はいつもどおりの無表情で。

「……そうか」

やはりアサトには少女が何を思っているかは判らなかつた。

だが、無表情の中に僅かに優しいものが含まれているようにも感じた。

「そうか」

だからもう一度だけそう呟いた。

第四話

雨は嫌い。

憂鬱ゆううつになるから。

大地を潤うるおす雨も私の心を癒してはくれない。

晴れの日も嫌い。

無遠慮な太陽の日差しが私を照らすから。

雲ひとつない青空は陰気な私の心をあざ笑っているように感じる。

人間も嫌い。

他人は私に優しくないから。

ヒトの中に居ると自分が独りなのを実感する。

私は嫌いなものが多い。

けど一番嫌いなのは私自身だ。

この世界に順応できない自分が嫌いだ。

だからこの世界も嫌いだ。

このどうしようもなく残酷で、

どうしようもなく美しい世界が、

私は大嫌いだ――

## 第四話 残酷でただ美しい青空

〈感応者〉。

それはゾイドと心を通わせる事が出来る者達の総称だ。

機体に触れる事で——もしくはは一定の距離まで近づくことでゾイドの心を感じ取る事が出来る。この能力の高い者はゾイドの感情の変化だけでなく、より具体的なメッセージを『言語』として受け取る事も出来る。

例えば彼女のように——

「……左前脚の付け根……それから左後脚の第二関節を見て欲しいそうです」

格納庫然とした空間に黒いゾイドが一体鎮座<sup>ちんざ</sup>していた。オオカミ型のフォルムを持つその機体は〈コマンドウルフ〉と呼ばれるタイプだ。

その機体に右手を触れ、静かに目を閉じる少女の姿があった。

年齢は十五、六歳。灰色<sup>アッシュ</sup>がかかった銀色の髪と、同じく灰色がかかった黒い瞳。抜けるような白い肌と相まって全体的に色素の薄い印象がある少女だ。

カスミ・シノザキ。

ここへクスノセ機獣派遣事務所 の所員であり、見習いのエンジニアでもある。

「どちらにも、恐らくアクチュエーターの金属疲労だと思えます」

抑揚に乏しい声でそう告げる顔には、声と同じく、何の表情も刻まれていない。

面識のない者が見れば機嫌が悪いのかと思うかもしれないが、これが彼女の地である。

綺麗な少女だが、まず第一に周りを寄せ付けないような硬質な雰囲気がある。

「どっちも左か、やっぱり癖<sup>くせ</sup>が出てんのかね」

カスミの発言に応じる声は黒いゾイドの腹の下から聞こえた。

どこか気怠<sup>けだる</sup>いような、明らかに元気とか覇気という言葉からは縁遠い男の声だ。

声の主は提示された箇所をざっと確認してカスミの横に並んだ。

アサト・タチバナ。

若干伸び気味の黒い髪と黒い瞳。

やや痩せ<sup>や</sup>気味の体軀<sup>たいく</sup>と色白の肌が不健康そうな雰囲気<sup>かみ</sup>を醸し出している。

よく見ればそれなりに整った顔をしているのだが、年齢に不釣り合いな、何かに疲れたような表情が印象的な青年だ。

「癖なんですか？」

隣に並んだアサトが工具箱を開くのを眺めながらカスミは尋ねた。  
「ん、前々からな。〈ヤミヒメ〉は左足で踏ん張る癖があるんだよ」

カスミは改めて〈ヤミヒメ〉と呼ばれた黒いゾイドを見上げる。

漆黒に彩られたカスタム・タイプの〈コマンドウルフ〉。

正式名称〈コマンドウルフDFC〉。

愛称は〈ヤミヒメ〉。

闇色に染まった姫——故に〈闇姫〉である。

通常のものとは違うのは色だけでない。スモーク・ディスチャージャーの代わりに両腰にはハイブリッド・スラスター・バインダーが装備され、背部にはライフルが一丁と試作型の『剣』がそれぞれ備わっている。

「……………」

綺麗だと思う。〈ヤミヒメ〉を見る度にカスミは胸の鼓動が高鳴るを感じる。

加えて、現在の〈ヤミヒメ〉の装備のアイデア——アタッチメントのみだが——が自分の考案したものということもあり、その感慨もひとしおだ。手前味噌なのは判っている。それでもカスミは特別な気持ちで一杯だった。

——ちいん……。

「——？」

金属製の部品か何かが床に落ちる音でカスミは我に返った。

音の発信源を探して視線を動かすと工具棚だなとコンテナの間の、ちょうどヒトが一人通れそうな隙間すきまに視線が釘付けになる。

「……………」

隙間は苦手だ。どうしても嫌な事を思い出してしまう。

カスミが〈クスノセ機獣派遣事務所〉に来るきっかけになった些細な事件の事を……。



カスミは学校で浮いていた。

最初はイジメと言うほど具体的な嫌がらせを日常的に受けていた訳ではないが、学校のクラスメイトとは折り合いが悪く、教室に居ても居心地が悪かった。

ヒトは社会性の動物だ。群れを成し、助け合わなければ生きていけない。

なのにヒトが三人以上集まれば争いが起きる。  
必ずはじき出され、犠牲に——『生贄』になる者が出る。

ヒトの社会は必ずしもそうだ。

誰もが他人を疑っている。それはヒトが嘘をつくようになってから——いや、知恵を得た瞬間から他人に対する恐怖は始まったのかもしれない。

誰が『敵』になるか判らない。ひよつとしたら自分が『敵』にされるかもしれない。なら自分たちで『敵』をでっちあげればいい。

理由など何でもいい。そんなものは口実だ。

『生贄』に供される者が出る事で安心する。少なくとも自分がその位置に置かれる事はなくなるから。

そういつた意味では『生贄』とは社会を形成する上での必要悪なのかもしれない。

だが、だからと言ってその立場に納得など出来るはずがない。

初めはただの隔絶だった。

無口でヒト付き合いの苦手だったカスミは当然、積極的に友人を作る事をしなかったし、それでも当面は何の問題もなかった。

しかしカスミは綺麗な女の子だった。いつそ美少女と呼んでも誰も文句などつけられないくらいの美貌を持っていた。

それは同性からは憧憬どうけいの対象となり、異性からは好意の対象となった。だが、それも最初だけだった。

学年を問わずカスミに交際を申し込んだ男子生徒は全て振られ、それを知った女生徒は『高慢な女だ』と反感を強め、振られた男子生徒の中には腹いせにカスミに嫌がらせをする者も出てきた。

教師陣も実質これを黙認し、和解の努力など端はなからする積もりも無かったカスミはハイスクールを入学三ヶ月目にして不登校となった。

何か目標があった訳でもなく、ただ同居している叔母おばへの建前で入学しただけだ。学校に行かない事に不満はなかったし、自暴自棄になりかけていた事もあり、不安の類たぐいもカスミには無かった。

だから街を歩いていて見知らぬ三人組に路地裏に引つ張り込まれた時も、特に何も感じなかった。

「よお、久しぶりだな」

両脇を連れの男二人に羽交はがい絞じめにされると、正面の男に話しかけられた。どうやらカスミを知っているようだが、当のカスミには見覚えはなかった。

「なんだよ、つれねえなあ？ 俺達の事なんて覚えてませんってか」

『くくくく』

正面の男に続いて、左右の男達も下卑た笑い声をあげた。

「……………」

カスミは無言で正面の男を見た。その表情には恐れも怒りも浮かんでおらず、ただ無表情に男を見ていた。その態度が気に入らなかつたのか、男は上着のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。

「どうした？ 怖くて声もでないか？ ああッ!?」

「……………」

男がナイフを振り下ろすと、カスミのシャツは下着ごと裂かれ、彼女の胸元が露になった。

鎖骨から腹部に掛けての艶かしい曲線が、処女雪を思わせる白い肌と相まって見るものを惹きつける。

決して豊満ではないが、成長途上故の侵し難い神聖さと、それを汚す背徳感を思うと、男は背筋に興奮が走るのを抑えられなかつた。

「なあ、さすがにそれはまずいんじゃないか？」

カスミを押さえている片方の男が気まずそうに言った。

「なにびびってんだよ。どうせこいつは何も言えやしない」

「そうだよな、それにここまできて止めるのもなあ」

三人目の男も興奮気味に正面の男に同意する。

「……………」

カスミはそれでも無言を通した。

「これでもだんまりか。まあいい、すぐに『ああッ、イイ』って言わせてやるよ」

そういつて男がカスミのスカートに手を伸ばした時――

「――あら。そんなにすごいんなら、お姉さんの相手をしてもらいましょうか？」

「ぐえッ！」

「かはッ！」

場違いに穏やかな声の介入と同時に、カスミを羽交い絞めにしていた男二人が前のめりに倒れてビクビクと痙攣している。

「いけませんねえ。女の子には優しくしろって親御さんに教わらなかつたんでしょうか？」

――あらッ？」

カスミの背後から現れたのは穏やかな微笑を浮かべた妙齡の娘だった。何か武器を使っ

た形跡はない。カスミを背に庇うように前に出ると男達の容姿に何か気が付いたようだ。「な、なんなんだよ？ あんたは!」

一瞬で仲間が倒され、状況が判らず慌てた男はナイフを娘に向けて怒鳴った。すると――

「――!」

「……誰でもいい。取り合えずナイフを捨てろ」

ナイフを持った男が後頭部に金属の筒状のものを押し付けられたのと、その背後から声が聞こえたのは同時だった。

「ひいっ!」

拳銃――そう確信した男はナイフを取り落とし、要求もしていないのに両手を挙げた。

「撃っちゃダメですよ、アサト。この子達、まだ未成年みたいですから」

自分が倒した男二人の顔を確認しながら娘が声を掛けると、アサトと呼ばれた銃を持った人物も、両手を挙げた男の容姿を確認する。どう見ても二十歳は超えてないだろう少年だ。

「……倒れてる仲間を連れてさっさと行け。それから、今後はこの辺りをうるつかない方がいい」

アサトが銃を仕舞いつつそう告げると、倒れた仲間を引きずるようにして少年達は慌てて路地裏を去っていった。

「やれやれ」

ため息をついて少年達を見送った男――アサトが連れであろう娘に目を向けると、彼女はカスミに声を掛けていた。

「もう大丈夫ですよ。怪我はしてませんか？」

妙齢の女性が優しく問いかけてくる。

(……もう大丈夫?)

カスミは掛けられた言葉を頭の中で繰り返す。するとようやく事態を呑み込めたのだろう。今更のように体が振るえ、その場に座り込んでしまった。

「そっちはどうだ、ハルカ？」

「気が張っていたんでしょう。緊張が解けて立っていられなくなったみたいです」  
アサトの呼びかけにハルカと呼ばれた娘が応える。

「……私……あのまま……」

「大丈夫……もう大丈夫ですよ」

震えるカスミをそっと抱きしめると、ハルカはなだめる様に優しく声を掛けた。



「——ミちゃん、カスミちゃん？」

ようやく自分が呼ばれている事に気付くと、カスミの正面に、つい今しがた思い描いていた娘が居た。

ハルカ・クスノセ。

カスミが住み込みで働いている（クスノセ機獣派遣事務所）の所長であり、カスミと同じ所員であるアサトの上司だ。

つややかな長い黒髪と黒い瞳。常に微笑を浮かべた穏やかな表情が特徴的な美人だが、彼女には大きな秘密があった。それは彼女が本当は男であるという事。

殊更喧伝けんでんしている訳ではないので、彼女の正体である事を知っている者は限られるが、生物学的には真正銘男性である。

この事実はカスミも先日知ったばかりだが、それ以降もハルカとの関係に変化は見られず、隠し事が一つ無くなった分、より親密になれたとカスミは考えている。

「——あ、はい！ なんですか」

慌てて返事をするカスミの視線の先に気付いて、ハルカが気遣わしげな視線を向けてくる。

「……大丈夫、もう大丈夫ですから」

そう言っただけで初めて出会った時のようにカスミを抱きしめるハルカ。

泣きたくなった。あの時の事を思い出さからではなく、こうして自分を気遣ってくれるのが、ただ嬉しくて……。



今思えば、先程の少年達にわずかに見覚えがあった。どれも学校でカスミに交際を申し込んで振られた男子生徒だ。

そんなことを考えていると自分を助けてくれた娘——ハルカが声を掛けてきた。

「もう落ち着きました？」

後になって知った事だが、彼女はある種の格闘技の経験者らしい。そんな風にはまるで見えない穏やかな微笑を浮かべてハルカが訊きいてくる。

場所は街の大通りに面したカフェ・テラス。四人掛のテーブルに空席が一つ。カスミが

ら時計回りにハルカともう一人——アサトと言うらしい青年が座つてメニューを眺めて  
いる。

ついでに言うと、今カスミが羽織っているジャケットは彼の物だ。カスミが穿いている  
スカートには合わないが、破られたシャツのまま歩く訳にもいくまい。

「……はい、もう大丈夫です。ありがとうございました、助けて頂いて」

精一杯笑顔を取り繕ったつもりだが、出来ていたかは自信がない。この処笑顔を  
つくった記憶がない。

そんなカスミの不器用な笑顔に気を悪くした様子もなく、ハルカは別の話題を振つて来  
た。

「食欲はありますか？ 食べられるなら食べた方がいいですよ、じゃないと、こんな不健  
康な大人になっちゃいますから」

そう言われて話を振られたのはカスミの正面の青年だ。

男としてはやや伸ばし気味の黒髪と黒い瞳。覇気だとか生氣と言った言葉とは真逆に位

置する場所にいるかのような、気怠げな雰囲気をもとっている。

「大きなお世話だ。お前も人のこと言えた義理か？」

「はて、何の事でしょう？」

とぼけたような調子のハルカには取り合わず、ウェイトレスの女性に注文をするアサト。

「クラブサンドのセットを三つ。コーヒー二つに——君はコーヒーと紅茶どっちがいい？」

『君』と言うのが自分だと気付くのに数秒を要したカスミは慌てて返事をする。

「——え、あの、私は……」

「いいんですよ、遠慮しなくて。ちなみにわたしのオススメはコーヒーです」

「あ……じゃあ、コーヒーで」

ハルカの笑顔に圧される形で二者択一する。

「ん、じゃあコーヒー三つで」

「かしこまりました。クラブサンドのセットを三つ、お飲み物はコーヒーですね」

注文を確認すると一礼して厨房へ下がるウェイトレスを見ながら——

「可愛い制服ですねえ、目の保養になります。日によっては『猫耳デイ』というのも  
あるんですよ」

「なんだそれ？」

ハルカの発言に適当に相槌を打つアサト。

「文字通り猫耳をつけて接客するんですよ。『いらっしやいませにゃん』と言った風  
に」

「恐るべし、しのぎを削るサービス産業か」

猫のポーズをとるハルカとは対照的に、興味なさげに返事を返すアサト。

自分を置いて他愛のない会話をする二人を『この人達は何なのだろう』とカスミが思案を巡らせていると、注文したメニューがテーブルを占拠した。鶏肉やベーコンやチーズ、野菜などをはさんだクラブサンドにホットコーヒーがそれぞれ三つずつ。

「さて、いただきますでしょうか」

「ん」

「……あ、いただきます……」

どうするべきかカスミが二人の動きを見張っていると、アサトは備え付けの角砂糖を次々とコーヒーに投入した……七つも。

「……………」

「彼、甘党なんですよ」

言葉を失ったカスミにハルカが解説した。

「苦いコーヒーなんぞ飲めるか」

さらに備え付けのミルクも入れてかき混ぜると、満足げにコーヒーをすすめるアサト。

一言いふべきか逡巡して、断念したカスミはなにも入れずブラックで一口飲むと――

「――美味しい……」

思わず声に出してしまった。

「でしょう？ ここのコーヒーはこの辺りでも美味しいと評判なんですよ」

ミルクのみを入れてコーヒーをかき混ぜるハルカが微笑を浮かべて言ってくる。

「あなた、コーヒーには一家言いっかげんある方ほうですか？」

『あなた』と言われて、まだ名前も名乗っていない事にカスミは気付いた。

「……あの、カスミ・シノザキと言います。コーヒーはブラック派です……」

「ああ、いけませんね。名前も言ってますでした。わたしはハルカ――ハルカ・クスノセと言います。コーヒーはミルクのみ。で、甘党の彼がアサト――アサト・タチバナです」

「――ん？ よろしく」

ハルカの紹介にクラブサンドを咀嚼そしゃくしながら応えるアサト。よく見ると皿の上にはクラブサンドから抜かれた野菜が載っている。

（野菜、嫌いなのかな？）

無作法な態度の筈だが、彼がやると不思議と愛嬌があるとカスミは思った。



「ハルカ、昼食は……。どうした？」

〈ヤミヒメ〉の陰からアサトが出ると、うら若い娘が二人、抱擁ほうようし合っている場面に遭遇した。

「なんでもありませんよ。ちよつとしたスキンシップといった処ところでしょうか？」

「……はい。なんでもありません」

カスミの目元が赤いのが気になったが、当人同士が何でもないといいなら何でもないのだろう。

「そうか？ いや——天気もいいし、昼食はそこで食おうかと」

言つて格納庫ハンガー入り口の近くに設置されたテーブルを指す。

「いいですね。ではそうしましょうか」

そう言うのとハルカは食事の用意のためハンガーを後にした。



カフェ・テラスで食事をしながらカスミ達は小一時間ほどの時を過ごした。ハルカとア

サトがゾイドに関する仕事を生業なりわいにしている事。カスミ自身の事。

自分の事を話すのは苦手だったが、不思議と出会ったばかりの相手とは思えない程ほど、カスミは素直に自分の事が話せた。

カスミの話をハルカは終始笑顔で、アサトは聞くともなしに無言で聞いてくれた。

そして——

遅い昼食を終えると一同はゾイドの整備工場に居た。

ゾイドに興味があるというカスミは二人が向かうという工場へ同行する事となったのだ。大型ゾイドでも十機以上は格納できそうな広い整備場には武装と装甲を外された〈ガンズナイパー〉や整備のため脚部を丸ごと外された〈プラスチックタイガー〉、いくつもの戦場を駆け抜けたであろう年季を感じさせる〈レッドホーン〉などがあつた。

工場の整備員の後に続き、カスミ達が目的のスペースに着くと、漆黒のカラーリングを施ほどこされオオカミ型のゾイドが居た。

〈コマンドウルフ〉だ。

「これがアサトの麗うつくわしの姫君——〈ヤミヒメ〉です」

ハルカの紹介を受け、カスミは黒い機体を見上げた。

「——綺麗……」

カスミは感じたままを言葉にした。

それは見た目だけではなく、そう思わせる高潔さがこの機体にはあったからだ。

「気に入ってもらえて何よりだ。しかし、『綺麗』——か」

カスミの隣に立ったアサトは彼女と同じように〈ヤミヒメ〉を見上げて言った。

「……やはりおかしいでしょうか。女がゾイドに対して綺麗と言うのは」

迂闊うかつなことを言ってしまったかと、カスミが少し後悔しながら訊ねると、

「いや、前に同じ感想を言った奴がいたなと思ってね」

そう言うアサトは正面を向いたまま優しげに表情を崩した。

（……こんな顔もするんだ）

それはカスミが今日初めて見る、アサトの無表情以外の顔だった。

「——ん？」

暫く〈ヤミヒメ〉を見上げているとアサトが何かに気付いた。

「どうかしました？」

「いや、なんか不快そうにしてるな——どうした？」

アサトが一步前に出て〈ヤミヒメ〉に近づく。

「——左脚に何かあるのか？」

無論ゾイドが人の言葉を話す訳もなく、〈ヤミヒメ〉は低くうなり声を上げただけだ。

左脚——外から見る分には前脚も後脚も異常は見られない。

「……タチバナさん、ちよつといいですか？」

「ん？」

カスミはアサトに断ると、〈ヤミヒメ〉の機体に手を触れて目をそつと閉じた。アサト

とハルカ、それに整備員が不思議そうにその様子を窺うかがう。

「……左後脚の冷却タンク……」

目を開けると、カスミは自分が口にした部位を見た。

「ふむ。ちよつと開けて見て貰もらえますか？」

アサトが催促さいそくすると整備員は今ひとつ納得できないような表情で脚部のメンテナンス

ス・ハッチを開くと、何か液体が滴したたり落ちてきた。

「うわ、冷却液のタンクが液漏れを起こしてますね。すみません、ここは新人がチェック

した筈はずなんです……すぐに取り替えますんで」

整備員は慌ててその場を離れるが、アサト達の視線はカスミに集中したままだった。

「……シノザキさんだっけ、君はゾイドの心が判るんだな」

その言葉は疑問形ではなく、事実を確認するような口調だった。

「……はい」

実際、事実だった。物心ついた頃にはゾイドの心の声が聞こえていた。しかし自分にしかその声は聞こえていないらしく、周りの子供には嘘つきと呼ばれ、大人達も誰も相手にしてくれなかった。

唯一信じてくれた当時は健在だった母親も、それはカスミだけに聞こえる声だから人は言っただけじゃないと言われた。その母も二年前に他界してしまった。

思えば、自分が人間不信になったのもこの能力のためだったかもしれない。今となってはどうでもいい事だが……。

「そうか、なら君は〈感応者〉かもしれない」

驚いた事にこの青年はカスミの言う事を笑うどころか、聞きなれない呼称で自分を呼んだ。

「——〈感応者〉？」

「ゾイドと心を通わせる事が出来る人間をそう呼ぶ。人によって能力の差はあるが……君の力はたぶん俺より強いだろう」

「……………」

アサトの言葉に、不思議な感情がカスミの心に溢れた。

——嬉しい。久しく感じる事なかった感情。どんな理由でもいい、評価された事に対する喜びを感じた。

そんなカスミを見て、ハルカは名案を思いついたように口を開いた。

「カスミちゃん、私の事務所で働きますか？」

「……唐突だな」

呆れ顔のアサトとは対照的に満面の笑みを浮かべて彼女は続ける。

「『思い立ったが吉日』と言いますし、これはお得な買い物かもしれませんよ？」

「にしても、本人の前で言うかね」

「どうですかカスミちゃん？」

思考がまとまらなかった。自分が必要とされている——その実感が沸かなかった。誰にも必要とされず、自分が必要のない人間だとずっと思っていたから……。

「——と言ってるが、どうする？」

歓迎するという訳でもないが、迷惑でもないといった様子でアサトが訊ねてきた。

(私は……)

カスミは思った。

この人達なら自分を変えてくれるかもしれない。

自分是被変わるかもしれない。  
だったら――

「……………は？」

その日からカスミの日常は変わった。



ハンガーを後にしたハルカの背中を見送って、カスミはひとつの疑問を口にした。

「……………あの、〈感応者〉って――」

「ん？」

床に落ちていたボルトを拾いながら応じるアサト。

「私達の能力って、何なんでしょう？」

「さあな。定義も曖昧だし、科学的に立証できない。ただ、昔からゾイドと会話するようにならコミュニケーションを取れたゾイド乗りの記録は多い。もっと昔は当たり前にあつた能力なのかもしれない」

アサトは淡々と事実を述べる。

「俺に言えるのは、君が俺より優れた〈感応者〉だという事だけだ。俺が心を通わせられたのは〈ヤミヒメ〉と……………」

曖昧に言葉を切るアサト。

「？」

「――この力が嫌いか？」

話題が変わったのか、それとも延長線上の話なのか判断しかねてカスミは言葉を濁した。「……………是非はありません。ただ、同じ人間とすら解かり合えないのについて思う事があるんです」

「確かに。〈感応者〉には社会不適應者が多いらしい――俺やカスミみたいにな」

アサトは皮肉げに笑う。

「ただ、〈感応者〉だったから今こうしている。過去はどうあれ、俺は今の生活にそれなりに満足してるのかもしれない」

「……………私は――」

どうだろう。昔は確かにこんな力無ければいいと思っていた……………けど、今は？

「二人とも、食事の用意が出来ましたよ」

ハンガーの入り口に設けられたテーブル・セットからハルカの声が聞こえた。

「ま——すぐに答えが出るものでもないし、答えなんか無いかもしれない。なら、結果的に良かったと思えばいいさ」

カスミを一瞥してアサトはそう宣うと、食事にありつくべくハンガーを出た。

(……結果的に良かったと思えば——か)

考えても仕方がない。

今すぐに答えを出さないといけない訳でもない。

なら結果的に良かったと思えばいい。

少なくとも『今』は幸せだ——そう思える。

「本当にいいお天気ですねえ」

雲ひとつない青空を見上げて、ハルカが気持ちよさそうに言った。

昔は青空が——この世界が嫌いだった……けど、今は——

「……そうですね」

今はこの青空も綺麗だと思える。

この残酷で、ただ美しい青空が。



第五話

初めて自分の手首を切ったのはいくつの頃だっただろうか。  
もうずっと昔の事の様で覚えていない。

リストカット。

自傷行為。

水を張ったバスタブに左手を入れ、カッターナイフで自分の手首を切った。

電気が走ったような痛み。

傷口からは血が浮かび上がり、赤いインクのように水面で広がった。

茫洋ぼうようとした意識であたしはそれを眺ながめていた。

痛みを感じる事で許されている様な気がした。

血を流す事で生きている様な気がした。

だから、あたしは自分を傷つける。

生きている事を実感するために――

## 第五話 オーバードーズ（前編）

正午をやや過ぎた時刻。

場所は〈クスノセ機獣派遣事務所〉の事務室。

長方形の部屋の中央に島をつくる様に配置された事務机と椅子が四組と、入り口から島を挟んだ向かい側——窓を背に、部屋全体を見渡せる位置に大き目の事務机と椅子が一組置かれている。席は計五つ。現在はそのうち二つが埋まっている。

大き目の事務机——所長用の席に座っているのは長い黒髪の娘だ。黒い瞳はとろんとしており、穏やかな微笑を浮かべて作業に集中している。

ハルカ・クスノセ。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長であり、この事務所内に限って言えば絶対的な発言力と権力をもつ存在であるが、その容姿には重役とか責任者といった雰囲気は皆無だ。花屋の店員や喫茶店のウェイトレスと言われた方が万人が納得するであろう、のんびりとした空気をまとっている。

もつとも彼女が見た目どりの娘ではない事を知っているのはごく限られた者だけだ。

そのハルカの席から見て、左手前の席——入り口から見れば右奥の席に座っているのは、年の頃なら十五、六歳の小柄な少女だ。灰色がかかった銀色の髪を肩口で揃え、同じく灰色がかかった黒い瞳。肌の色も白く、全体的に色素の薄い印象がある。

カスミ・シノザキ。

無表情に黙々と目の前の作業に没頭するカスミの姿は、普通の神経の者であれば声をかけるのを躊躇ちゆうちゆうしてしまうような頑かたく々な雰囲気がある。

この年頃の少女であれば学校に通うのが当たり前だが、とある事情で彼女はここ、〈クスノセ機獣派遣事務所〉で事務員兼エンジニア見習いとして働いている。

働くといってもこの事務所の主な業務内容はゾイドとそのパイロットを提供する事であり、カスミの仕事は主に雑用である。

「そろそろお昼ですねえ。一段落したら昼食にしましょうか」

時計を見上げてハルカがのんびりとした口調で呟いた。

「わかりました。ホットケーキはどうでしょう」

しばし黙考してカスミが応えた。

「いいですねえ。じゃあ、そろそろアサトを起こさない」と

何故か楽しそうにしているハルカとは対照的に、カスミは無言で主不在の正面の席を見る。

「……ダメ人間」

「手厳しいですねえ。まあ、自業自得ですが」

「本人のためになりません」

「けど、彼を起こすのもわたしのささやかな幸せなんですよ」

もう何度となく繰り返したやり取り。学習能力がないのではない。ただ、同じ事を繰り返すのも彼女らのコミュニケーションであり、日常の在り方だった。

そんな会話をしていると業務用の電話が鳴った。

「——お電話ありがとうございます。〈クスノセ機獣派遣事務所〉、所長のクスノセです

……あら、マヘリア。おひさしぶりですねえ」

ハルカが電話に出ていくつかやり取りをすると、早々に会話は終了した。

「仕事ですか？」

マヘリアという名前に心当たりはなかったが、会話の内容からいってハルカの知り合いであるらしい事はカスミにも察する事が出来た。

「ええ。三時に〈教団〉のシスターが二人来ますので、お茶の用意をお願いしますね」

〈教団〉。

惑星Ziにおいて最大規模を誇る宗教組織である〈エイミス教団〉——通称〈教団〉。

現時点で最後の戦争——俗に〈大戦〉と呼ばれた全大陸に及んだ戦争の終結から半世紀。

軍勢力は疲弊しきり、社会システムは崩壊した。

絶望的とも言える状況下で人々は『神』という偶像にすがった。

シンプルな教義と、なによりも豊富な資源・資金力を持っていた〈教団〉は人々に容易に受け入れられた。

人はパンのみに生きるにあらず……しかし、所詮<sup>しよせん</sup>パン無しでは生きていけない。〈教団〉の影響力は戦後間もない世界に、瞬く間に広がった。

さらにゾイドを含めた独自の戦力を保有し、事実上〈大戦〉を終結に導いた〈教団〉は軍に代わって各地の治安維持に務め、現在では惑星Ziにおける最大勢力となっていた。

ちなみに『シスター』とは〈教団〉における対外交渉全般を担う役職の事である。

カスミが今日の業務内容に追記をしていると、部屋の入り口から三人目の所員が姿を現した。

伸び気味の黒髪と眠たそうに開かれた黒い瞳、やや痩せ型の体躯に、どこか疲れたよう

な物憂げな青年。気怠げな雰囲気は寝起きというのもあるだろうが、彼の場合は終始この有様である。

アサト・タチバナ。

〈クスノセ機獣派遣事務所 唯一の実効戦力である 処のゾイド乗りである。

「……おはよう」

一応とはいえ挨拶をするくらい元気はあるようだ。あくびを噛み締めながら、自分用にあてがわれた席に座るアサト。

「あら、残念ですねえ。ちようど起こしに行こうかと思っていた処ですよ」

「そうか。早起きはするもんだな」

心底残念そうにするハルカにアサトはにべもなく返す。

「もう。カスミちゃんからも言っちゃってください」

「……ダメ人間」

「手厳しいな」

特に気分を害した様子もなくアサトは目の前の少女に視線を移す。

「……………」

「……………」

互いに相変わらずの無表情だったが、根負けしたように先に目をそらしたのはカスミだった。心なしか顔に赤みがさしている様にも見える。

共に暮らすようになって約半年。アサトはようやくこの少女の扱いに慣れてきた様に思う。

「なに二人して見つめ合っているんですか。そうだアサト、三時にマヘリア達が来るそうです」

「マヘリア達が？ 例の件か？」

アサトの表情がやや忌々しげに歪む。

「さあ？ それだけではないようですが、詳しくは直接会って話すと」

「まあ、電話で済ますような話じゃないわな」

考えても仕方がないと思ったのか、アサトはそれ以上言及しなかった。

「……あの、マヘリアさんというのはどういった方なんでしょうか？」

カスミは先ほどから話題に上がっている人物について訊いてみた。

「そういえばカスミちゃんは会うのは初めてですねえ」

「……会わせない方がいいんじゃないか？」

「ここに来る以上、会わせないわけにもいきませんし……大丈夫ですよ、取って食われる

事はありませんから」

「喰われる可能性はあるかもな」

「……つまり、どういう方（かた）なんでしょう」

要領を得ないハルカとアサトの会話に、カスミはマヘリアという人物像を想像できないでいた。

「まあ、直接会うほうが早いでしよう」

「なんというか……『濃い』奴だな」

「……………」

結局、カスミは何の心の準備もなく本人と対面する事となった。



綺麗な女の子——それが娘の、少女に対する第一印象だった。

『私はフィア。四番目だから フィア。あなたは？』

自然に出る筈（はず）のない鮮血を思わせる紅（あか）い色の髪と瞳。肌は抜けるように白く、その対比が目（め）に痛（いた）いくくらいにコントラストを成（な）している。

見た目どおりの年齢なら十二、三歳。しかし、少女の纏（まと）った雰囲気（まぶ）は見た目どおりではなかった。

無邪気（こわく）そうでいて蠱惑（こわく）的な表情。それは大人びているというより、中身と不釣り合いな容れ物（ようぶつ）に入れられてしまったかのような印象がある。

『……………』

娘は言葉が出なかった。

はつきり言（い）ってしまえば見惚（みと）れていた。この世界にはこんな綺麗な生き物（いきもの）がいるのだと……。

『どうしたの？』

小鳥（こどり）のように小首（こびし）をかしげる少女——フィア。綺麗な紅（あか）いショートヘア（ヘア）が動き（うご）きに応じてさらりと流（なが）れる

『……あたしはカグヤ——カグヤ・イザヨイ』

フィアの問いに娘（むすめ）はそう答（こ）えた。

こちらは髪（かみ）も瞳（ひとみ）もどこにでも居（い）そうな黒（くろ）色（いろ）。年齢（ねんれい）は二十代（にじゅうだい）の前半（ぜんはん）くらいだろう。

だが、少女（しょうじょ）と同じくその身（み）に纏（まと）う雰囲気（まぶ）は異質（いしつ）だった。

黒（くろ）いセミロング（セミロング）の髪（かみ）は適（た）当（たう）に切り（き）りそら（そ）えた様（よう）に長（なが）さがま（ま）ちま（ま）ちで、あ（あ）ちこ（こ）ち（ち）ではね（は）ねてい

る。右目には眼帯。衣装はレースとフリルをふんだんに用いた黒いシャツにストラックス。腰にはバレオ風の布がスカートの様に巻かれている。

ゴシックロリータ。

カグヤの衣装を一言で言い表すならそれだろう。見る者を魅了せずにはおかないファッションは、彼女の持つ魔性にも似た美貌と合わせる事で、どこか危うい背徳感を感じさせる。

だが、フィアはそんな事は気にした風もなく、

『カグヤ……いい名前だね。あなたにぴったりの綺麗な響き。よろしくね——カグヤ』

そう言うとき紅い髪の少女はカグヤに微笑んだ。それがフィアとカグヤの最初の出逢いだった。

「——グヤ。カグヤってば」

自分を呼ぶ声に気が付き、後部座席サフ・シートを振り返ると、回想の中と同じ少女がカグヤを見ていた。変わらぬ紅い瞳で。

「……なに？ フィア」

「またぼーっとしてる。早く始めろって、さつきから怒鳴ってるよ？」  
あきれたように言われて、カグヤはようやく通信の声に気付いた。

『——カグヤ・イザヨイ！ 聞こえているのか!?!』

神経質そうな男の声がコクピット内のスピーカーから聞こえる。

（……そうだ。あたしは今、ゾイドに乗っている）

正式名称〈ジェノザウラーLD〉——愛称は確か〈シラヒメ〉だったかと思い出す。

ゾイドに個別の名前をつける感覚がカグヤには判らなかつたが、フィアはそう呼んでいる。  
いる。

混濁こんだくした意識の中、カグヤはピル・ケースから錠剤タブレットを大量に出して飲み込んだ。

（……今はこの白い〈ジェノザウラー〉——〈シラヒメ〉とフィアの適合テスト中だった）

カグヤの意識が徐々にクリアになっていく。

「……フィア、始めようか」

「いつでもどうぞ」

待ちかねたと言わんばかりの返事が複座から聞こえる。

「……カグヤ・イザヨイ。テストを開始する」

『! ……了解』

まだ何か言いたげな様子だったが、通信相手はしぶしぶ文句を飲み込んだ。

「行くよ、〈シラヒメ〉」

フィーアはそう言うとも目を閉じる。すると少女の体がぼんやりと紅い輝きを放ち始めた。その光景は幻想的で、現実味が無い。

カグヤはこの感覚が好きだ。暖かいものを背中から感じると共に、操縦桿を通して、ゾイドの機体にも力が漲みなぎっていくのを感じる。

体が溶けて機体とひとつになっていく感覚。

快感と破壊衝動がこみ上げて来る。

「……行こうか、すべてを壊しに——」

それが戦闘開始の合図だった。



午後三時。時間通りの来客を応接室に通し、カスミは人数分のコーヒーを入れると応接室のドアをノックした。

「失礼します」

部屋には四人は楽に座れそうなソファが二つ向かい合わせに置かれ、その間にテーブルが一つ置かれていた。カスミはまず、来客である修道服の二人の前にコーヒーを入れたカップを並べていく。

「苦労様です。この子がうちで働いてもらっているカスミちゃんです。お二人とも初対面ですよね」

「カスミ・シノザキです。よろしくお願いします」

ハルカの紹介にカスミが応じる。

「そしてこちらのお二人が〈教団〉のシスターのマヘリアと——」

「——まあまあまあッ！」

ハルカの言葉をさえぎり、並んで右側——ハルカの正面の娘が立ち上がった。年齢はハルカと同じくらいだろうか。二十代前半から半ばの美しい娘だ。

セミロングの金髪と穏やかな碧眼へきがん。整った顔つきと落ち着いた物腰。

美人というだけならハルカとカスミも相当な器量良しだが、彼女にはどこか気位の高そうな、貴族の令嬢といった品のよさを感じる。

だが——

「いいですわ！ 素敵ですわ！ エクセレントですわ！」



激しく興奮する娘に一步引きながら、カスミは第一印象を早くも覆くつがえされていた。

「貴女あなたおいくつ？ スリーサイズは？ フリフリはお嫌いかしら？」

「はいはい。落ち着いてくださいねえ、マヘリア」

つかみ掛からんばかりの勢いの娘——マヘリアをシャットアウトするように、カスミとの間に入ったハルカがなだめる。

「もう、お姉さま！ そうやってすぐに女の子に声をかけるのやめてください！」

そう言うのはマヘリアの左隣——我関せずとばかりにコーヒーに砂糖を入れるアサトの正面に座る少女だ。

年の頃ならカスミと同じくらいだろうか。ベリーショートのかすんだ赤毛に褐色の肌、勝気そうな黄色い瞳。万人受けする美人ではないが、愛嬌あいきょうのある可愛らしい顔つきをしている。

「お姉さまはそうやって誰だれ彼かれ構かわす……浮気者！」

「！ ミゼット、それは違いますわよ」

真面目な表情をして赤毛の少女——ミゼットに視線を移すマヘリア。

「わたくしが声を掛けるのは秀逸な素材だけですわ。そんな節操無しの様な言われ方は心外でしてよ」

「美人ならなんでもいいんでしょう？ 十分節操無しです！」

「ミゼット……」

悲しそうな表情でミゼットの瞳をのぞき込むマヘリア。

「神は全ての人間に対し平等ですわ」

「だ、だからなんですか」

気圧けおされる様に言いよどむミゼット。

「だから——わたくしも全ての可愛い女の子に平等なのです」

「——お姉さま！」

言い合い——一方的にだが——を再開した二人のシスターを尻目に、コーヒーをすするアサトの隣に座るカスミ。

「な？ 『濃い』だろ？」

「……はい」

改めて各自の紹介が終わったのは十分後だった……。

カスミから見て正面右の、セミロングの金髪と碧あおい瞳のしっとりとした雰囲気あおの娘がマヘリア・メリル。

左の勝気そうな、癖の強い赤毛に黄色い瞳の少女がミゼット・レミントンと言うそうだ。

容姿の違いからも判る通り、二人は実の姉妹という訳ではない。〈教団〉では先輩のシスターが新人のシスターを指導する『姉妹制度』というものがあり、二人はそのペアらしい。

「相変わらずですねえ、マヘリア」

「失礼。つい取り乱してしまいましたわ……カスミさん、こちらに座りませんか？」

ハルカへの相槌もそこそこに、カスミに空いている自分の左の席を勧めるマヘリア。

「……いえ、結構です」

身の危険もそうだが、何故か自分を睨むように見ているミゼットから視線を外しながら、カスミはマヘリアの申し出を辞退した。

「——それで、今日は何の用で来たんだ？」

アサトの切り出しでようやく話が本題に入る。

「そうですね。それではまず、〈ヤミヒメ〉に関する〈教団〉上層部の意向から」

（〈ヤミヒメ〉の話？ どうして……）

突然〈教団〉のシスターの口から〈ヤミヒメ〉の名前が出てカスミは疑問に思ったが、アサトとハルカの表情に変化はない。あらかじめ話の内容を知っていたという事だろう。

「結論から言えば〈ヤミヒメ〉の処遇はこれまでどおり、アサトさんに一任する事となりましたわ。それが貴方に〈ヤミヒメ〉を託した、アヤカ姉さまの希望でしようし」

「……そうか」

（アヤカ？ アサトさんに託した？）

自分の知らない事情に次々と疑問符が浮かぶカスミ。

「感謝しなさいよ。本当なら妹候補だったマヘリアお姉さまが引き継ぐのが筋なんだから」  
納得がいかないのか、不機嫌そうにアサトにつっかかるミゼット。

「そうかい。そいつはどうも」

「なによ。引っかかるわね」

「いんや。別に」

「ちよっと、言いたい事があるなら言いなさいよ！」

挑戦的な口調のミゼットをなだめるマヘリア。

「落ち着きなさいなミゼット。いけませんわよ。淑女たるもの常に毅然としていなければいけませんわ」

「……説得力が無いです、お姉さま」

先程の豹変振りを見れば確かに説得力は無い。

「それからもうひとつ。こちらもアサトさんに関わる話です」

気を取り直して話を続けるマヘリア。

「先日、貴方が遭遇した白い〈ジェノザウラー〉の動向がつかめましたの。場所は東エリア第三十八地区の〈ZOITEC〉社の研究所です。しかも工作員の調査の結果、違法な研究もしている様なんです」

「と言うと？」

もったいつけるようなマヘリアにアサトは先を促す。

「〈オーガノイド〉に関する研究です」

「……………」

アサトの表情が微妙に変化した。それは彼の表情を見慣れた者でなければ気付かないよ  
うな、些細な変化だったが。

「貴方の『探し物』もそこにあるかもしれませんわよ」

（〈オーガノイド〉？ それにアサトさんの『探し物』って……？）

またも新たな疑問符がカスミの頭に浮かぶ。この〈タスノセ機獣派遣事務所〉に来て約半年、まだ自分が知らない事が多くあるのだと少し寂しい様な気持ちになる。

「ちなみに、貴方が救助したと言う〈グスタッフ301〉という機体ですが、〈ZOITEC〉社にそのようなコードの機体は無いという返答でした」

「……………なんでわざわざそんな情報を？」

「親切心、ではいけませんか？」

アサトの問いにマヘリアは婉然と答えた。

「他人の厚意はひととおり疑う事にしてる」

「心の貧しい男ね」

「人を見たら泥棒と思え——つてな」

なぜか喧嘩腰のミゼットを軽く受け流すアサト。

「……………そうですね。強いて言うなら、未確認の脅威に対して〈教団〉の貴重な戦力を割きたくないといった処でしょうか。〈ジェノザウラー〉というただでさえ強力なゾイド。それに貴方の報告によれば〈DFC〉と同様のシステムを積んでいる可能性がある。更に〈オーガノイド〉の存在……。不確定な要素が多すぎるんですの」

「だから都合よく俺達を利用しようかと？」

「無論、正式なお仕事として依頼致しますわ。それにお互いに利害は一致しますでしょうか？」

〈教団〉は治安維持の一環として、違法な研究の摘発も精力的に行っている。しかし、今回はその対象の脅威度が高いため外部に応援を要請する——確かに不自然な話ではない。

「……………いいだろう。構わないか、ハルカ？」

「ええ。構いませんよ」

あつさりと了承するハルカ。もともと正式に『仕事』として依頼された以上、実際に『仕事』をするアサトが承認すれば所長に是非はない。

「では詳しい打ち合わせに入りましょうか」

アサトの答えを予想していたように、〈教団〉のシスターは用意していたいくつかの資料をテーブルに広げ始めた。



あわただ慌しく整備員が行き交う格納庫内。ハンガー壁沿いに設けられたキャットウォークの手すりにもたれかかっている娘がいた。

適当に切ったような不揃いな長さの黒い髪。瞳も同じく黒いが、その右側は眼帯で覆われ見ることは出来ない。

肌は白く、からだ身体は見る人間によっては病的とも言える程瘦せている。

「……………」

黙って自分の愛機を見上げるその瞳には、なんの感情も見受けられない。

視線の先には白い巨体。それはまがまが禍々しいまでの威圧感と、圧倒的な破壊の意思を娘に感じさせる。

「あ——カグヤ、またこんな所にいる」

背後から聞こえた声に顔を向けると、雑然としたハンガーには不似合いな少女がいた。

ゆったりとした衣装に身を包んだ、あか紅い髪と瞳の少女が。

「……………なに、フィータ？」

視線を正面に戻して返事を返す娘——カグヤ・イザヨイ。

彼女は〈ZOITEC〉社の不正規技術開発部門——通称〈ファントム〉に所属するゾイド乗りである。不正規というだけあって、おおやけ公には出来ない技術の開発・試験等を行うのがその存在目的とされている。無論、カグヤの名前も〈ZOITEC〉社の社員リストには記載されていない。

「なにって訳じゃないけど、用がないと居ちゃいけない？」

フィータと呼ばれた、同じく公には存在しない事になっているであろう少女がカグヤの横に並ぶ。その口調はどこことなく拗ねているようにも聞こえる。

「……………そうね。一時的でも、あたしとあなたはパートナーだものね」

「？ どうして一時的なの？」

カグヤの言葉にフィーアが首をひねった。

「……フィーアの欲しいものが手に入ったら、あたしはもう必要ないでしょう?」

カグヤの言葉に卑下<sup>ひげ</sup>するようなニュアンスはない。ただ事実を事実として語っている様な口振りだ。

「そっか。そこまで考えてなかった」

そう言うと、フィーアもカグヤの視線の先——白い鋼鉄の竜<sup>あか</sup>に紅い瞳<sup>あか</sup>を向ける。

〈ジェノザウラーLDS〉——通称〈シラヒメ〉。

かつてのガイロス帝国軍が〈デスザウラー復活計画〉の際に偶然発生させたテイラノサウルス型ゾイドだ。

荷電粒子砲と高い戦闘能力を持つ強力な機体だったが、その強すぎる破壊衝動に耐えられるパイロットの数が少なく、極少数しか生産されなかったという背景を持つ。

本来は黒を基調としたカラーリングだが、この〈シラヒメ〉と呼ばれる固体は『骨』や『化石』を思わせる淡い白色をしている。

格闘戦用の装備だけでなく、背部と頭部にはそれぞれ射撃戦用の火器も備えており、汎用型の戦闘用ゾイドである事を物語っている。

「……前回の戦闘記録は観たよ。発掘されたばかりの機体と融合して、コンバット・システムの調整も無しで戦闘するなんて」

「だってすぐ近くに〈DFC〉の反応があったから、つい」

カグヤの言葉に悪びれた様子もなくフィーアは言った。

先日、とある遺跡から発掘されたばかりの〈シラヒメ〉は、搬送中に突如<sup>とつじょ</sup>、暴走状態に陥<sup>おちい</sup>り、同機を運んでいた〈グスタフ〉を攻撃。その後の偶発的な戦闘により機体を小破させている。

カグヤがフィーアと出会う約一ヶ月前の事だ。

「私と〈シラヒメ〉だけじゃ、アサトと〈ヤミヒメ〉には勝てなかった。だからカグヤに手伝って欲しいの」

「……アサト? それが例の〈漆黒の狂襲姫<sup>きょうしゅうぎ</sup>〉のパイロット?」。

「そうだよ。私が欲しいもの——私だけのものにするの」

「……いいよ。あたしは戦えればなんだっていい」

抑揚のない口調。フィーアから見たカグヤの表情は、瞳を眼帯で覆われている事もあって変化は確認出来ない。

「カグヤってさ、やっぱ壊れてるよね」

「……そう? 自分じゃよくわからない」

「そうだよ。だから私はあなたに惹かれたんだもん」

「……そう。フィードがそう言うのなら、そうかもしれない」

沈黙。

周囲の喧騒だけが二人の間に流れた時――

『総員、第二種非常態勢。所属不明のゾイドが接近中。各自、現状の作業を即時中止し、非常マニュアルA1を実行されたし。繰り返す――』

突然の警戒アナウンスがスピーカーから流れ、整備員とハンガーにいた研究員達が慌てて動き始めた。

非常マニュアルA1とは、機密情報をすべて外部ハードディスクに移し、書類やメイン・コンピュータ等の形として残るデータをすべて破棄する事を意味する。

「……襲撃？ もしかして――」

「うん。あつちから来てくれたみたい……すごい、私ドキドキしてる」

胸を押さえ恍惚とした表情を浮かべる少女を見て、カゲヤも実感した――

（……壊れてるのはこの子も同じか）

間もなくして研究所の警報は第一種非常態勢に移行した。

第六話

オーバードーズ  
過剰摂取。

読んで字の如く、薬物の大量接種。

精神を安定させる薬も量が過ぎれば毒になる。

その目的は自殺志願、現実逃避、自傷行為の一環だったりするが、あたしの場合はどうに当たるのだろうか？

様々な薬を試したが、どれもすぐに耐性が出来てしまい効果は長続きしない。

むしろ副作用で身体に異常を来たす事の方が多い。

それでも薬を飲み続けるのは効果を期待しているからというより、自分を傷付けるためという方が正しい気がする。

罰を受ける事で許しを請うているのかもしれない。

誰に？

なんの罪から？

判らない。

自分で自分が判らない。

それはとても気持ちが悪い。



## 第八話 オーバードーズ（後編）

マヘリアとミゼットの来訪から一夜明けた翌日。

「そろそろ始まった頃でしょうか」

オフィスの時計を見上げてカスミ・シノザキは呟いた。

「そうですね。心配ですか？」

相変わらずの微笑を浮かべたままハルカ・クスノセは訊ねた。

「……一応は」

「訊きたい事があるんじゃないですか？ 例えばアヤカさんの事とか」

この少女がこうして、自分から会話を始めるのは珍しい。察しのいいハルカは、カスミの胸中を当てて見せた。

「……それだけじゃありません。〈ヤミヒメ〉の事とか、アサトさんの『探し物』とか……」

……まだ、私の知らない事がたくさんあるんだなって、昨日の話を聞いていて思いました」

普段どおりに見えるが、その口調にはやや寂しげなものの感じさせる。

「別に秘密にしている訳ではないんです。ただ、あまり面白い話でもありませんから」  
珍しく困ったような表情を見せるハルカ。

「あ……いえ、込み入った事でしたら別に……」

「そういう訳でもないんですよ——そうですね、どこから話しましょうか」

思索するようにハルカは暫し黙考する。

「〈ヤミヒメ〉はアサトがある人から引き継いだものなんです。その人の名前がアヤカ……」

…アヤカ・T・シユバイツァーです」

「……………」

物思いに耽る様なハルカの言葉を、カスミはただ黙って聞いた。

アサトの過去とアヤカという人物の存在について。



東エリア第三十八地区——〈ZOITTEC〉社の研究所を〈ヤミヒメ〉のレーダーは捉

えていた。

すでにこちらの接近に気付いていたのだろう。迎撃機と思われる移動物体もレーダーには映っている——その数、三。

「情報より少ないな。出し惜しみか？」

〈ヤミヒメ〉の操縦席でアサト・タチバナは訝しげに呟く。

『研究所付近に荷電粒子の残留反応と、〈セイバータイガー〉と思われる残骸が確認出来るだけで約三機分あります』

コクピットの内部スピーカーから発せられる落ち着いた女性の機械音声マシン・ヴォイスが、センサーの捉えた情報をアサトに告げていく。

〈ヤミヒメ〉に搭載された自律型戦術支援人工知能装置——クノキだ。

本来であれば手動マニュアルでやらなければならないような操作のほとんどをパイロットの代わりに実行してくれる。直接的なゾイドの操縦以外はほぼ全て音声入力ヴォイス・オートマか、クノキの独自の判断で行ってくれるという訳だ。

「ふむ。内輪揉めでもあったのか」

『現状で脅威となりうるのは接近中の機体のみです。機体識別は全てセイバータイガー・タイプ。数は変わらず三。どれも標準装備と確認』

次々に優先度の高い順に現状を報告していくクノキ。

『マスター、ご指示を』

「ん。一対三か——なんとでもなるだろ。このまま行く。クノキ、援護よろしく」

『了解しました』

「——行くぞ〈ヤミヒメ〉」

——ウオオオオオオオオオッ！

アサトの呼びかけに応えるように咆哮を上げる漆黒の〈コマンドウルフ〉——その名は〈ヤミヒメ〉。

かつてヘリック共和国にて実戦配備され、高い汎用性と扱いやすさを以て広く運用された高速戦闘用ゾイドだ。

後継機とされた〈シヤドーフォックス〉や〈ケーニツヒウルフ〉が配備された後も、余裕のある設計と拡張性による派生機バリエーションを数多く生み出した名機である。

この〈ヤミヒメ〉も同様に独自のカスタマイズを施され、背部にはアタッチメントを介してライフルと実剣を装備。腰部にはスモーク・ディスチャージャーに換わり、ハイブ

リッド・スラスター・バインダーを装備している。

全高七メートルの黒い機体が駆ける。

標的が有視界に入り、火器管制装置が敵を有効射程に捉える。

「まずはフォーメーションを崩してもらおうか」

トリガー  
引き金のひとつを絞ると多重照準システムが起動——アサトの眼球の動きを追跡して  
六つの照準サイトが同時に標的を捉える。

「捕まえた！」

絞ったトリガーを押し込むと、両腰のバインダーから各三発ずつ——計六発の  
ホーミング・レーザー  
自動追尾式光学兵器が放たれる。六条の赤い光は、三機の〈セイバータイガー〉の上空で  
一ヶ所に集束し、再び拡散して地上に——標的の真上に雨のように降り注いだ。

慌てた三機は蜘蛛の子を散らすように散開。中央の一機が正面に飛びこんで来た。

着地の瞬間を狙って〈ヤミヒメ〉はライフルを二射。二五〇ミリ弾が〈セイバータイガ  
ー〉のкокピットのある頭部と下顎に着弾、破壊する。

「——まず一機」

その表情は普段どおり気怠いものだが、声音にはうつすらと充足感が滲んでいた。



楽な仕事の筈だった。

傭兵達の仕事は研究所の警備と、テスト機との模擬戦。

しかし、昨日の模擬戦で二機が大破、一機が中破し、彼らの戦力は実質三機の〈セイバ  
ータイガー〉のみとなった。

〈セイバータイガー〉。

かつてゼネバス帝国が開発した〈サーベルタイガー〉をガイロス帝国が強化・改修した  
高速戦闘用のトラ型ゾイドだ。その速度は中型ゾイドでありながら時速二四〇キロを誇り、  
射撃・格闘とそつなくこなす高性能機である。

無論、愛機に対する信頼から来る傭兵達の油断もあっただろう。相手は〈コマンドウル  
フ〉が一機。数は半分に減ったとはいえ、戦力差は三対一。

こちらが負ける筈がない。

しかし——接敵からわずか数秒で僚機が一機撃破された。

なおも目標は高速で迫ってくる。

『何なんだよアイツは——!?!』

パニック気味になっているもう一機の僚機から通信が入るが、〈セイバータイガー〉一番機のパイロットにも答えられる冷静さは無かった。

『おいッ、援護しろ！ う、わあああああ——ッ……』

援護どころではない。一瞬で僚機はコクピットを潰され、通信は途絶した。

（ただの〈コマンドウルフ〉のはずだ……黒いカラーリングの……）  
そこで男はようやく思い出した。

〈漆黒の狂襲姫〉と呼ばれる黒い〈コマンドウルフ〉の噂を……。



一気に畳み掛ける——決断するが早いか、アサトはわずかに距離が近い右の〈セイバータイガー〉に狙いを定めた。

反撃すべきか回避行動を採るべきか迷ったのだろう。どっちつかずで動きの取れない標的との距離を一気に詰め、その頭部にストライク・クローを突き立てる。

コクピットを失い、二機目の〈セイバータイガー〉が力なく崩れ落ちた。

「二機目——あとひとつ！」

——ウオオオオン！

〈ヤミヒメ〉が何かを催促するように一声吠えた。

アサトの脳裏に一瞬 〈ヤミヒメ〉の背部に装備された『剣』のイメージが浮かぶ。

「——『使え』っていうのか？」

〈ヤミヒメ〉の背部に新たにマウントされた試作型炎熱重斬刀——〈カグツチ〉。

「新しい武装、使いたくしてしようがないか」

アサトの問いに応えるように更に〈ヤミヒメ〉が咆哮を上げた。

「よし……〈カグツチ〉展開」

『了解。〈カグツチ〉、イニシャルイク起動——』

アサトの要請に従い、クノキは〈カグツチ〉の起動手順を次々に行っていく。

背部の〈カグツチ〉とアタッチメントである〈シダレザクラ〉を繋ぐフレキシブル・アームが伸長し、〈ヤミヒメ〉の右腹部から翼を広げるように、地面と水平に刀身が展開される。

「〈業火炎上〉——」

『安全装置解除。準備完了』

アサトの激発音声により〈カグヅチ〉の安全装置が解除され、その刀身が熱を帯びる。

残る敵機に向かい〈ヤミヒメ〉が疾走する。

射撃による反撃はあるが、ロクに照準も付けられていないため、全て明後日の方向へ虚しくされる。

無論、うろたえ弾に当たるような〈ヤミヒメ〉ではない。

更に接近——〈カグヅチ〉の間合いに入る。

「——吠えろ、〈カグヅチ〉！」

刹那、刀身の熱が最大まで高まり、〈ヤミヒメ〉と〈セイバータイガー〉がすれ違う。すれ違いざまに〈カグヅチ〉の切っ先が〈セイバータイガー〉の装甲を裂き、内部機器を灼き斬った。

右脚部を前後共に、胴体ごと切り裂かれ、最後の〈セイバータイガー〉も崩れ落ちた。

「終わったか。しかしこいつは……」

〈カグヅチ〉の刀身の背の部分の冷却機構から大量の熱排気が行われる。

「強力すぎる……」

テストで既にその威力は知っていたアサトだが、改めて——しかも実戦で——使ってみて、その威力に驚愕する。

冷却処理の終わった〈カグヅチ〉を再び待機状態に戻し、研究所の方へ愛機を向ける。

「さて、次が本命だが……マヘリア達は上手くやってんのかね？」



〈Z O I T E C〉社・不正規技術開発部門〈フロントム〉の地下第一発令所。

「護衛の〈セイバータイガー〉は全滅した模様です！」

オペレーターらしい男が報告をする。

「全滅……一機の敵に何という事だ」

報告を受けた責任者らしき神経質そうな男がうめいた。

「ど、とにかく脱出だ！ 持てるだけのデータを持ち出して、残りは速やかに破棄しろ！」

男が指示を出すと、タイミングを見計らった様に声がした。

「——それは困りますわね」

女性の声と共に発令所の扉が開き、サブマシンガンと防弾ジャケットで武装した兵士達

が数名なだれ込んだ。

「な、なんだ貴様らは!？」

「〈教団〉の〈代行者〉——と言えば伝わりますか？」

兵士達に続いて、ゆっくりと入室してきた修道服姿のシスターが言った。

マヘリア・メリル。

この場には不似合いなしっとりとした気品が特徴の金髪碧眼の娘だ。

「この研究所の責任者はどなたですか？ 貴方あなたかしら？」

微笑を浮かべたまま銃を構えるシスター。銃は〈グロック〉と呼ばれるハンドガンである。

「ち、違う！ 〈フアントム〉の連中はすでに脱出艇に乗り込んで……ここに残っているのは施設管理の人間ばかりだ」

「脱出艇とおっしゃいましたね。それはどちらに？」

〈グロック〉の照準を男につけたまま質問を続ける。

「か、格納庫だ。もう火が入っているはずだ。本当だ！」

男の話を信用したのか、シスターは通信機で格納庫の制圧に向かった部隊に連絡を取った。

『——あ、お姉さま！ こちら格納庫です。それらしい船舶は見つけたんですが、例の〈ジエノザウラー〉が護衛に付いてて、生身じゃどうしようもありません！』

通信に応えたのはマヘリアのパートナーであるミゼットだった。

『場所は研究所の滑走路付近です。すぐにあのボンクラを奇越よこしてください！』

「アサトさん。今の通信、聞いてらっしゃいますか？」

マヘリアがミゼットとは別の人間に呼びかけた。今回の作戦で連絡をしているアサトだ。

『ああ、聞こえたよ。これよりボンクラが滑走路方面に出る。撃つなよ』

「了解。——さて、わたくし達はわたくし達の仕事を続けますわよ。職員は一ヶ所に集めて拘束。工作半は可能な限りのデータを吸い出してくださいな」



研究施設の南方面にある滑走路。

脱出艇を先導するように白い〈シエノザウラー〉が姿を現した。

「クノキ、こないだのヤツと間違いないか？」

『データ照合……先日と同一の機体と確認しました』

アサトの問いにクノキが答える。

〈ヤミヒメ〉の姿を認めると、白い〈ジェノザウラー〉の視線がこちらを向いた。

それと同時に〈ヤミヒメ〉のkokピットに通信回線が開いた。

『……初めまして。あなたがアサト・タチバナ？』

通信モニターに音声と共に女性の映像が映し出される。白い〈ジェノザウラー〉からだ。

年齢はアサトと同じくらいだろうか。黒髪黒瞳の若い娘だ。美人ではあるが、右目を覆う眼帯と、焦点が合っていないような虚ろな表情がまず印象に残る。

『……あなたがそいつのパイロットか。『初めまして』と言ったな、顔を会わせるのが初めてって意味か？』

『……いいえ。前回の戦闘時のパイロットはあたしじゃない。だから本当に初対面』

『よく判らん。なんで俺の名前を知ってる？』

『……………』

『——カグヤ！ もういいでしょ。代わって！』

黒髪の娘の言葉をささぎる様に通信から別の声が聞こえた。こちらはもっと若い——むしろ幼いと言った方がいい声だ。

『アサト！ 私に逢あいに来てくれたんでしょ？』

新たな通信回線が開いて、先の娘の映像の横に並ぶ。同じく目の前の〈ジェノザウラー〉から発信されている。

年の頃なら十二、三歳。紅あかい髪と瞳の少女だ。

『……クノキ——？』

紅い少女の姿に、記憶の中の人物の面影おもかげを感じてアサトは思わず呟つぶやいてしまった。

『あー、失礼だよ。女の子の名前を間違まちがうなんて……』

紅い髪の少女がふて腐れた様に言った。

『この間は負けたけど、今日は条件は一緒だからね』

『どういう事だ。それにお前は誰だ。なんで俺を知ってる？』

『前回は私だけだったけど、今回はカグヤがいるってこと。私はフィーア——そう呼んで。』

この白い〈ジェノザウラー〉は〈シラヒメ〉っていろいろの。なんであなたを知ってるかは後で教えてあげる。だから今は楽しもう？』

場違いに天真爛漫な口調で言う少女——フィーア。

（つまり前回のパイロットはこの子だったのか？ それに『条件は一緒』？ まさかこの子は……）

『……フィーア、もういい？』





「よし。そのまま付いて来い」



〈代行者〉。

それは〈教団〉の執行部隊。数名のシスターにより指揮される荒事専門の武装部隊だ。推進器を破壊され、その場に残された脱出艇にミゼットを始めとする数名の武装隊員が突入を開始した。

「……やられた」

赤毛の少女は、その勝気そうな表情を歪ませた。

脱出艇に乗っていたのは操縦士二名のみ——客室は無人大った。

『つまりそちらは 囧 だったと？』

「そのようです、お姉さま」

平時と変わらぬ口調のマヘリアの通信にミゼットは悔しそうに応えた。

『判りましたわ。操縦士を連行してこちらと合流。あとはアサトさんに期待しましょう』

「わかりました……大丈夫でしょうか、あのボンクラ」

『大丈夫ですわよ』

「……根拠は？」

『ありませんわ』

「……………」

マヘリアとペアを組んでだいぶ経つが、ミゼットは未だに姉の性格をつかみかねていた。いい加減なのか、それだけアサトの実力を買っているのか。後者だとしたら——そう思うとミゼットはなんとなく不愉快な気持ちになった。



戦闘が始まって数分。距離を取っての撃ち合いでは埒があかず、戦いは飛び道具の応酬から接近戦に移っていた。

一対一の戦闘。

まともに白兵戦をした処で〈コマンドウルフ〉が〈ジェノザウラー〉に勝てる道理はない。

単体での機体スペック・得意とする分野が違うのだ。戦略的な価値ならいざ知らず、単



〈ヤミヒメ〉は大地に脚を踏ん張ると、激しく雄叫びを上げた。  
 コクピットの奥の双眸に紅い光が宿る。



速い。しかし、所詮は〈コマンドウルフ〉——それがカグヤの〈ヤミヒメ〉に対する評価だった。

この〈シラヒメ〉は自分の思いどおりに動いてくれる。目で追える動きなら対処できる。

敵の近接戦闘用装備の第一撃はEシールドで弾き、間合いを確認する。その刀身の長さは約三メートル弱。〈シラヒメ〉の尾による迎撃を警戒してか、やや踏み込みが浅い。

二撃目は右——〈ヤミヒメ〉から見れば、刀身を展開させていない左側——にステップを踏んで回避。しかしこれを読んでいた様に、〈ヤミヒメ〉は左前脚を軸に、回し蹴りの要領で半回転、遠心力を乗せた斬撃が〈シラヒメ〉の左腕を斬り飛ばした。

〈シラヒメ〉は体勢を立て直しながら着地。レーザー・ライフルで〈ヤミヒメ〉の背後を狙うが、回避行動によって距離を取られる。

「……一撃離脱。まともに組み合う気は無いみたいね」

「そうでしょ。〈コマンドウルフ〉の膂力りよりよくで〈ジェノザウラー〉と取っ組み合いなんて自殺行為だもん」

冷静に分析するカグヤに対し、フィーアはさも当たり前のように言う。  
 左腕を持っていかれた事に対する動揺はない。

更に三度目の接近。斬撃の回避を諦め、残った右腕で熱を帯びていない剣の柄をつかみにかかる。

カグヤの意図に気付いたのか、〈ヤミヒメ〉は直前で剣を背部に格納し、右肩から体当たりを仕掛けてきた。

「……くっ！」

〈シラヒメ〉のコクピットに振動が伝わり、カグヤの身体を揺さぶる。

更に〈ヤミヒメ〉はほぼゼロ距離にも関わらず、両腰のバインダーから赤い光の軌跡を無数に放ってきた——ホーミング・レーザーだ。

〈シラヒメ〉の機体にいくつもの光の線が走り、装甲を貫かれたいくつもの箇所こで小爆発が起きた。

〈ヤミヒメ〉はその爆発にまぎれて離脱。〈シラヒメ〉と距離を取った。

「……フィーア、損害状況は？」

「大丈夫。まだいけるよ」

カグヤの問いにフィーアは事も無げに応じた。

「……あのパイロット、あたしと同じ匂いにおがする」

「匂い？ どんなの？」

「……確かめてみようか」

四度目の接近を試みる〈ヤミヒメ〉のコクピットを、焦点がずれた様なせきがん隻眼でカグヤは見つめる。

「……Eシールド展開」

「避けないの？」

不思議そうに訊ねるフィーアだが、言われた通りにEシールドを展開する。

高速で迫る〈ヤミヒメ〉の剣が、〈シラヒメ〉の展開する強力なエネルギーの力場と正面からぶつかる。

大気中のイオンがプラズマ化し、大量の火花を散らして視界を覆う。

先に身を引いたのは〈ヤミヒメ〉だった。視界がゼロになった瞬間に剣を格納して、即座に〈シラヒメ〉と距離を取った。

「……やつぱり。あのパイロット——死にたがりだ」

「そうなの？」

「……まっとうな人間は、あんな無茶な戦い方はしない。あんな特攻じみたやり方……自殺志願者？」

「あはっ！ カグヤとおんなじだ」

納得がいったように短く、あか紅い少女が無邪気に笑う。

「でもダメだよ？ カグヤは死んじや」

「……判ってるよ。うん？ 様子が変わった？」

〈シラヒメ〉同様に〈ヤミヒメ〉から漏れ出ている紅い光が、より強くなつた様に見えた。

黒い機体は大気を揺らすように咆哮を上げると、またも〈シラヒメ〉に疾走して来る。

カグヤはビル・ケースを取り出すと、タブレットを数粒飲み込んで敵機を見据みすえる。

「『同調』したのかな？ ちよつとやばいかも」

フィーアが〈ヤミヒメ〉の変化に気付き言った。

「……はあ。いいね——すごくゾクゾクする」

背筋を走る悪寒がカグヤの感覚を刺激する。左腕の傷痕がうず疼く。

「……なんか、もうイツちやいそう……」

恍惚こうことした表情を浮かべ、喘ぐあえように言葉を紡ぐカグヤ。

「……Eシールド最大出力で展開。同時に荷電粒子砲、Sチャージ」

「どうするの？ 次は大きいのが来るよ？」

「……言つとおりにして」

「はいはい」

熱に浮かされたようなカグヤの様子に何を言っても無駄と思ひ、フイーアは言われた通りに手順を踏んでいく。

力場によって固定されたエネルギーが防壁となつて〈シラヒメ〉の前面に形成される。

「……どう出る？」

〈ヤミヒメ〉のパイロットを想ひ、カグヤはぼつりと呟いた。



モード2。

それは〈DFC〉に設定された制限リミッターの第二段階までの解除と、パイロットであるアサトと〈ヤミヒメ〉の同調を意味する。

同調はより高いパイロットとゾイドの一体化を図る事で、機体の反応速度を極限まで高め、文字どおり『人機一体』の状態になる。しかし、パイロットとゾイドの境界線あいまいが曖昧となり、最悪、パイロットの精神が異常をきたす危険性リスクも負う事になる。

「〈カグヅチ〉 抜刀モード」

『了解。〈カグヅチ〉フルドライブ、チャージ・セット』

アサトの指示に従ひ、クノキがシステムを処理していく。

すると、〈ヤミヒメ〉背部のアタッチメントと〈カグヅチ〉を繋ぐアームが伸長し、剣が頭部右横に展開する。〈カグヅチ〉の柄えを口に咥くわえると、刀身を保持さやしていた鞘はずが外れ、背部に格納される。

柄コネクターの接続端子によって、エレクトロン・バイト・フアングのエネルギーが〈カグヅチ〉に流れ込む。

『チャージ・コンプリート、スタンバイ・レディ』

「よし。行くぞ、〈ヤミヒメ〉！」

漆黒のオオカミが駆ける。

対する〈シラヒメ〉はすでにEシールドで待ち構えている。しかもこれまでにない強力な出力だ。

フルドライン  
完全稼働の〈カグツチ〉にもEシールド突破能力はない。  
故に〈カグツチ〉で斬り掛かるならEシールドを何とかしなければならぬ。  
接触まで約三メートル――

「――ッ！ 〈エネルギー・ブラスト〉！」

アサトがトリガー・ボイスを発すると共に〈ヤミヒメ〉の正面に青白い閃光が放たれた。質量を持った光の奔流が物理的な衝撃となって〈シラヒメ〉のEシールドと衝突した。

瞬間、エネルギーの対消滅が起こり、Eシールドは力場を維持できず消滅した。もはや〈シラヒメ〉を守る盾は存在しない。

〈カグツチ〉の熱を帯びた白刃が、その喉元めがけて迫る。

必殺の一撃。

しかしとつさに残った右腕を射出する〈シラヒメ〉。

撃ち出されたアンカー・クローは〈カグツチ〉に斬り裂かれながらも、わずかにその軌道を上にずらした。

「ちッ！ 浅い――！」

〈シラヒメ〉自身が生身を逸らした事も手伝い、斬撃は〈シラヒメ〉の首を切断するには至らなかった。

「もう一撃――」

返す刀で更に一撃を加えようとするも、左側面からの荷重を乗せた〈シラヒメ〉の尾による反撃に回避を余儀なくされる。

後方に跳ぶと、正面を向いた〈シラヒメ〉と目が合い、そのカメラ・アイの向こう側にカグヤと名乗った娘の表情が見えた気がした。嗤っている。

同時、〈シラヒメ〉の口腔部から砲身が展開され、エネルギーの集束が確認できた。

〈荷電粒子砲!? チャージが早すぎる――回避、いや駄目だ……!〉

瞬間的に判断する。

「Eシールドを前面のみに多重展開！ 絶対後ろに通すなッ！」

『了解しました』

〈カグツチ〉を放棄し、〈ヤミヒメ〉は四肢を広げて地面に機体を踏ん張らせる。

高密度のEシールドが最小面積に設定され、複数の層に渡って展開される。

回避は出来ない。荷電粒子砲の予測射線にはマヘリア達のいる研究所がある。

「来るぞ！」

通常では考えられない速度でチャージされた荷電粒子砲が発射された。

アサトの視界がまばゆい光に包まれ、衝撃と共に〈ヤミヒメ〉のEシールドの力場と拮

抗した荷電粒子が拡散されていく。

「くッ……耐えろ——〈ヤミヒメ〉！」

耳をつんざく様な轟音と、けたたましい警報がコクピットを包む。

時間にすれば数秒。しかし、アサトにしてみれば数分とも思える時間が経過する。

荷電粒子砲の照射は止まらない。

〈ヤミヒメ〉の状態を示す表示画面に次々と被害状況が表示されは消えていく。クノキが

高速でダメージ・コントロールを行っているのだ

「……………くッ」

アサトは歯を食いしばり、ひたすら心中で愛機を励ました。『耐えろ』——と。

やがて飽和状態となった荷電粒子砲とEシールドのぶつかり合うエネルギーが爆発した。

爆風が振動となってアサトの身体を襲う。

爆音で微かに耳鳴りがする。

気付けば〈ヤミヒメ〉はクレーター状になった地面の中心地にいた。

〈シラヒメ〉の姿はすでにない。

『機体を強制冷却。コンバット・システム再起動。各部チェック中』

周囲は静寂に包まれ、クノキの状況報告のみが淡々と響いた。

「……………奴は？」

『索敵可能圏内に敵影無し。荷電粒子の残留反応により、追跡は困難です』

あらかじめ答えを予測していたのであろう気の抜けたアサトの問いに、やはり淡々とクノキが応えた。

「……………逃げた——いや、痛み分けか……………」

更に脱力したようにシートにもたれ掛かるアサト。

モード2による同調の影響でひどく疲れを感じる。更には荷電粒子砲を間近で受け止めた恐怖が今になってやってきた。

「……………なんで生きてるんだろうな——俺は」

『……………』

独り言の様なアサトの呟きに、しかしクノキは答えなかった。



「……………」

戦場を離脱する〈シラヒメ〉のコクピットでカグヤは呆けたように虚空を見つめていた。

あの時、一瞬だがカグヤは〈ヤミヒメ〉のパイロットと——アサトと目が合った気がした。

あの目は自分と同じだ。生きていることに実感が持てない、死にたがりの目だ。

（………あたし、どうして生きてるんだろう）

無意識にピル・ケースを取り出す——中身はすでに空になっていた。

（……興奮してる？ それとも怖いのか？）

自分の身体からだを抱くようにカグヤは腕を回して身を縮める。

（……あたし、震えてる？ どうして？）

盲目のように両腕を前に出し、その手が空くうを搔かく。

「………ファイア……来て……」

後部座席に座っているであろう少女を呼ぶ。すでに彼女の身体から紅あかい光は見られない。

「うん？ ちょっと待って」

シートベルトを外し、ファイアは狭いコクピット内で、体重を感じさせない軽さでカグヤの前に降りた。

カグヤはその小さな身体に正面から腕を回し、少女の小ぶりに胸むねに顔うすを埋める。

そんなカグヤを不思議そうに眺めなが、きよんとした表情でファイアは訊ねた。

「——？ 寂しいの？」

「……お互い様」

「そっか。そうだね」

納得したようにカグヤの頭を抱き、ファイアは優しくなる。

「大丈夫。カグヤには私がいるよ」

「……あたしは、生きていていいの？」

「うん。一緒に行こう？」

「……………」

壊れた娘と壊れた少女。

壊れかけの世界で彼女達は生きている。



第七話

こんなにも近くににいるのに、私は貴方あなたと触れ合う事すら出来ない。  
こんなにも貴方を感じる事が出来るのに、私は想いを伝える事すら出来ない。

貴方が望むなら、私はすべてをかけて貴方を護る。

貴方のためなら、この身を投げ出す事さえ厭いとわない。  
だから……。

いや、見返りなどいららない。

求めてはいけない。

大切なヒトを護り抜けず塞ふさぎこんでいた私に手を差し伸べてくれた貴方。

貴方がいたから、私は在ある事が出来た。

貴方がいてくれたから、私は赦ゆるしを乞こう事が出来た。

貴方が……。

貴方は、そこにいますか？

貴方は、そこにいてくれますか？

## 第七話 想い、少しだけ…

目が覚めると見慣れた天井が見えた。この三年間、ほぼ毎日見続けた天井だ。それでアサトは今寝ているのが自分の部屋のベッドだと認識した。

「ん？ あ、やっと起きましたねえ」

アサトが声のした方に視線を向けると、ベッドの脇わきに置かれた椅子いすに座る娘が目に入った。

歳の頃なら二十代半ば。落ちていて見えるが、実際はもつと若いかもしれない。

長く伸ばしたつややかな黒髪と黒い瞳。穏やかな微笑を浮かべた表情を見ると、この世のありとあらゆる悪意など本当は存在しないのではないかとさえ思わせる。

「大丈夫ですか？ 顔色は…いつも悪いですね」

娘はアサトの顔をのぞき込むように接近すると、冗談めかして言った。

彼女の名前はハルカ・クスノセ。

アサトの所属する〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長であり、事務所の最高責任者である。

のんびりとした美しい娘だが、彼女が見た目どおりの娘ではない事を知る人間は少ない。

「…顔が近い、離れる」

「もう。そんな憎まれ口を言われると、このまま押し倒したくなっちゃうじゃないですか」

無然ぶぜんとした口調のアサトに対して、いたずらっ子のような笑みを浮かべるハルカ。

「無理矢理っていうのもいいですね…あ、なんかドキドキしてきちゃいました」

あお向けのアサトを組み敷くようにベッドに上がりこむハルカ。その表情はやや上気したように紅潮こうしやうしている。

長い黒髪が重力に引かれて、肩からさらりと流れ落ちる。

「まずはキスから——優しくしてくださいね？」

「主導権イニシアチフにぎってる奴がなに言ってる…降りろ」

「つれないですねえ。そんなにイヤなら抵抗してくれていいんですよ？ 出来ないでしょ

うげど」

ハルカの言う事は正しい。彼女の容姿からは想像も出来ないが、ハルカはある種の格闘技経験者だ。それを差し引いても細身のアサトの脊力りよりよぐでは彼女を引き剥がす事はことすら

出来ないだろうが……。

「さあ、どうします？ 同意の上か、無理矢理かの違いですよ？」

「……悪魔め」

「悪魔でいいですよ」

頬ほおにかかる髪を右手で押さえながら、徐々にハルカの唇くちびるがアサトに迫る。二人の身体が密着する。息遣いが、鼓動さえ聴こえる距離に近づく。

「……………冗談です」

囁ささやくような声がアサトの耳元をくすぐる。

「よかった……目が覚めて、本当に……」

髪に隠れて表情は見えないが、その声がわずかに震えている。

「もう、起きないんじゃないかって……」

「……………すまん」

左手をハルカの頭を抱くように回し、その髪をなでる。

静寂が部屋を満たす。時間そのものが停止したようにしばしの沈黙が降りた。

——こんにちは。

「失礼します——」

控えめにドアをノックする音に続いて、声の主が入室してきた。

年の頃なら十五、六歳の美しい少女だ。

アッシュブロンド  
灰色がかかった銀髪を肩口で切りそろえ、瞳は灰色がかかった闇色、肌は抜ける様に白い。

彼女が持つ色素の薄い印象と、その身に纏まとう硬質な雰囲気からは、触れれば壊れてしま  
いそうな危うさを感じられる。

「……………」

いつそ美少女と呼んで差しつかえない美貌の少女は、その無表情を維持したまま、部屋  
の光景に言葉を無くした。表情からは判らないが、彼女なりに動揺しているのかもしれないな  
い。

「……すみません、取り込み中です」

「大丈夫ですよ、もう済みましたから」

部屋を出ようとする少女をハルカが引き止めた。普段どおりの微笑を浮かべているが、  
その瞳にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「…………ハルカさん、何かあったんですか」

ハルカの顔を見て、少女は訊ねた。

「うふふ、何かあったと思いますか？」

対するハルカは意味ありげに言葉を濁して見せた。

「何もしないなら、取り合えず降りてくれ」

組み敷かれたままの体勢でアサトがぼやく。

「あら、何かしてもよかったですか？」

「……言葉の綾だ。早く降りろ」

ようやくハルカがベッドを降りると、アサトは上半身を起こして少女に視線を移す。

少女の名前はカスミ・シノザキ。

ここへクスノセ機獣派遣事務所 の所員である。学校には諸事情があり通っていない。

「……もういいみたいです。ご無事でなによりです」

相変わらずの無表情だが、少しは心配してくれていたらしい。

「ん、ありがとう——しかし、もちっと可愛げのある言い方は出来ないもんかね」

気を悪くした様子もなく、ため息混じりに言ってみる。

「……すみません、可愛げがなくて」

「失礼ですよ、アサト。カスミちゃんこんなに可愛いのに。心配してもらえただけあり

がたいと思わないと、罰が当たっちゃいますよ」

「そうだな、罰が当たるのは嫌だしな」

天罰など信じてはいないが、文句を言っても仕方がない。贅沢を言ったらきりがない。

今はただ、こうしてここに戻ってこられた事にアサトは満足していた。



ハルカとカスミが去った部屋で、アサトは簡単に身支度を整えた。

やや伸び気味の黒髪と黒い瞳。痩せ型の体躯に物憂げな表情。

アサト・タチバナの特徴を挙げるならこんな処だろう。

年齢は二十歳をやや過ぎたばかりだが、物事を達観した老人の様な——むしろ諦めに  
も似た——雰囲気がある。

『多くを期待しない』『なるようになる』が彼の基本スタンスだからかもしれない。

「ん……」

背伸びをすると背中骨が鳴った。身体がだるい。

ハルカの話では丸二日眠っていたらしい。

白い〈ジェノザウラー〉——〈シラヒメ〉との二度目の戦闘の直後、〈ヤミヒメ〉はシステム・ダウン機能停止、アサトは気を失い、マヘリアの手配した〈教団〉の〈グスタフ〉で機体ごとここへ運ばれたそうだが、アサトは記憶が抜け落ちたように何も覚えていない。

「同調の影響か……」

意識がまだ混濁している。

——〈シラヒメ〉。虚ろな目をした隻眼の娘。紅い少女。〈DFC〉。クノキ……。

「〈ヤミヒメ〉……」

愛機の名を呟くと、アサトは自室を後にした。



カスミはモニターを一心に見つめていた。

普段どおりの無表情に普段どおりの装いだが、ひとつだけ彼女の雰囲気と異にする要素があった。形の良い鼻先に乗せられた視力補正器具——いわゆる眼鏡の存在だ。

常日頃から伶俐な印象が強い少女だが、今はそれに加えて更に理知的な雰囲気を醸し出している。もしこの場にマヘリアが居たら、鼻血を噴いて倒れるか、教師然としたスーツを目前で用意したかもしれない。

それはともかく——

「……………」

現在カスミが観ているのは、前回の〈ヤミヒメ〉の戦闘記録だ。彼女はアサトに頼んで、毎回〈ヤミヒメ〉の戦闘記録のコピーを受け取っていた。

建前は新たな戦術や装備の開発・研究のためだが、彼女にとっては実益を兼ねた趣味のようなものだ。

(やっぱりすごい……)

縁無しノンフレームのレンズを通して観る映像にカスミは心中でそう思った。〈ヤミヒメ〉に設置された定点カメラの映像なので視点アングルは固定なのだが、それでも戦闘の緊迫感アツマエは十分に伝わってくる。

(〈コマンドウルフ〉が〈ジェノザウラー〉と対等に渡り合うなんて)

ただでさえ〈ジェノザウラー〉は特殊なゾイドなため、元々の生産数が少なくカスミも実物は見た事がない。しかし、残された戦闘記録や性能データスペックを信用する限り、並みのゾイド——それこそ〈コマンドウルフ〉で太刀打ち出来るような機体ではない。

しかし、カスミはそれを可能としている要因ファクターを知っていた。

〈ヤミヒメ〉——その正式名称である〈コマンドウルフDFC〉の末尾に記されている〈DFC〉と呼ばれるシステムの存在だ。

何の略称かは不明だが、尋常ならざる力を与える〈ヤミヒメ〉の切り札である事は間違いない。

カスミはモニターの脇わきに別の表示窓ウインドウを開き、〈ヤミヒメ〉のスペックを表示させた。もう何度も読み返した各種データが記載されている。

〈DFC〉——それは一種の『ゾイドコア活性化装置』だとカスミは考えている。かつて研究されていた〈オーガノイド・システム〉のような。

しかし、残された資料ではそのすべての疑問に回答がつけられない。例えば、通常時にはその起動に制限リミッターが掛けられている事がそうだ。

〈DFC〉 第一段階ファースト・リミッターの解除——これを『限定起動』と呼ぶ。

これによりゾイドコアが活性化し、運動性が上昇。更にEシールドの展開が可能となる。

そして第二段階セカンド・リミッターの解除——これが『モード2』だ。

こうなると最早人間の反応速度や動体視力でゾイドを操縦する事は不可能だ。そこでパイロットがゾイドと同調し、文字通り『人機一体』となることでその問題を解決した。

ゾイドの手足を自分のその延長とし、その感覚すら同調させることで。

無論、この状態はパイロットの肉体・精神に多大な負担を掛け、場合によっては自我を維持できず、ゾイドそのものとなってしまいう危険性も孕はらんでいる……。

「……………」

カスミが戦闘記録の方へ目を向けると、戦況は最終局面を迎えていた。

件の『モード2』を使い、更に〈カグツチ〉を抜刀モードにして呐喊とっかんする〈ヤミヒメ〉。

その機体からは各所から流血するように紅い光あかが漏れ出している。

そして、白い〈ジェノザウラー〉の展開するEシールドに接触するかと思われた瞬間、

〈ヤミヒメ〉の正面に青白い光の奔流ほんりゅうが発生し、Eシールドと接触、対消滅を起こした。

「……これが、〈エネルギー・ブラスト〉」

思わず声に出してしまった単語をカスミは反芻はんすうした。

Eシールドとは準物質化したエネルギーが、ある種の『力場』によって任意の空間に固定された『壁』のようなものだ。

では、発生したエネルギーが力場によって固定されなかったら？ 〈エネルギー・ブラスト〉とはこの応用だ。

機体から発生し、力場によって固定されなかったエネルギーは外に向かい、やがて拡散する。有効範囲は狭いが、使いようによっては強力な武器となる。

無論、全てのEシールド搭載機に可能という訳ではない。同調によって拡大したパイロットの空間把握能力と、クノキによる高い演算処理能力がそろって初めて可能となる芸当だ。

「……………」

記録映像が終了し、待機状態となったモニターに写る自分の顔を見つめたまま、カスミは黙考した。

（本当になんなのだろう、この〈ヤミヒメ〉というゾイドは——）

初めはただの憧れだった。強さの中に高潔さを秘めた——綺麗な子。

けど、今は……。

『〈ヤミヒメ〉はアサトがある人から引き継いだものなんです』

先日ハルカから聞いた言葉が思い出される。

意を決したカスミはデータをまとめると、〈ヤミヒメ〉の居る格納庫<sup>ハンガー</sup>へ足を向けた。アサトもそこにいるはずだ。

（訊いてみよう、本人に直接）



事務所兼住居<sup>けん</sup>である本部棟と同じ敷地内にある格納庫——通称・ハンガー。そこでアサトは愛機を見上げていた。

地球種<sup>ちきゅうしゅ</sup>でいう処<sup>ところ</sup>のオオカミの姿<sup>かたど</sup>を象<sup>かたど</sup>った機体。

〈コマンドウルフ〉と呼ばれる機種だが、この個体はそれとは別に〈ヤミヒメ〉という愛称<sup>あなづな</sup>で呼ばれている。

その漆黒に塗られた機体を、アサトはただじっと見つめていた。

「——アサトさん」

背後から掛けられた声に振り向くと、銀髪の少女が立っていた。

その氷のような美貌も、感情が読めない表情もすで見慣れたものだ。だからアサトは少女に感じた違和感の正体に気付くのに数秒を要した。

「イメチェンか？」

「c」

突然の事に何を言われたか判らなかつた少女は、はっとして自分の視界と世界を隔<sup>へだ</sup>てて



いるものの存在に気付いた——いや、正確には思い出したという方が正しいだろう。眼鏡だ。カスミは眼鏡を掛けた自分の顔が嫌いだった。あくまで本人の意見だが、ただでさえ表情をつくるのが苦手なのに、この上メガネを掛けると、より近寄りがたい雰囲気を出してしまう——そう感じているのだ。

だからカスミは人前では裸眼で通っていたのだが……。

「そ、そんなんじゃないやありません……たまたま掛けていただけです」

そう言うのと彼女にしては慌てた様に眼鏡を外すと、腰のポーチにしまった。

「そうか？ 俺は結構いいと思うぞ、知的で」

「……からかわないでください」

わずかに朱み<sup>あか</sup>の差した表情を悟られないため、うつむき気味になるカスミ。

(どうしてこの人は、平気でこういう事が言えるんだろう)

アサトの言葉に他意はない。なのに自分だけが心を乱している事に、彼女は理不<sup>りふじん</sup>だと知りつつも苛<sup>いらだ</sup>立ちを感じた。

「——で、なにか用だったんじゃないのか？」

先ほどの話題には拘泥<sup>こうでい</sup>せず、アサトはカスミに促<sup>うなが</sup>した。

「あの、これを」

そう言うて彼女が差し出したのは一枚の記録媒体<sup>メディア</sup>だった。

「なんだ？」

「前回の戦闘記録を分析して組んだ補正プログラムです。(カグヅチ)はただでさえ、(ヤミヒメ)が扱うにはサイズが大き過ぎます。通常時ならまだしも、抜刀時は<sup>トップ・ヘビー</sup>重心が前方に集中になるため、バランスが取りづらいはずです」

「まあ多少は……」

いつになく饒舌<sup>じょうぜつ</sup>なカスミに、アサトは気圧<sup>けお</sup>されたように応える。

「そこで抜刀時の機体の重心バランスや力のモーメント、脚部の接地圧、それから——」

こうなるとカスミの話は長い。普段の反動なのか得意分野のためかは判らないが、恐らくはその両方だろう。ヘタに口を挟むより、黙って聴いている方が賢明だと知っているアサトは適当に相槌を打ってやり過<sup>こ</sup>した。

「——という訳です」

約十分に渡る講義を終えた彼女は、『なにか質問は？』と言わんばかりに間を置いた。

「……………」

「……アサトさん、私の話、聴いてました？」

無言で応じるアサトに、カスミは出来の悪い生徒を見るような目を向けた。

「あ……、要はそのプログラムをインストールすれば、〈カグツチ〉の抜刀時の安定性が上がる、と」

「要約するとそういう事です。と言っても、数値上は八パーセント。体感できるほどの変化は望めませんけど……」

そこまで言うつと先程までの饒舌ぶりは鳴りを潜め、カスミは普段の様子に戻ってしまった。自分の力不足を嘆くように。

しかし――

「いや、充分だ。ありがたく使わせて貰うよ」

返ってきたのは賞賛の言葉だった。

カスミの厚意に気を遣った訳ではない。戦場ではわずかな差が生死を分ける局面が多々ある。戦場に身を置くアサトはそれを身をもって知っている。

だからこの言葉に嘘偽りは無い。

「あ、いいえ……」

嬉しかった。自分のしたことで感謝される――それは自分の存在が認められたということだから。

アサトの顔を正視できず、カスミは眼前に佇む機体――〈ヤミヒメ〉に目をやった。その変わらぬ美しさにカスミは心奪われる。

しかし、今の〈ヤミヒメ〉からは、その機体を持つ本来の存在感が感じられなかった。まるで心を閉ざしているようにカスミは感じた。

「たまにこうやって塞ぎこむんだ、このお姫様は」  
カスミの疑問を察したのか、アサトが口を開いた。

「あの傷の事、気になるか？」

〈ヤミヒメ〉の左の首筋には二条の爪痕がある。それはカスミが初めて〈ヤミヒメ〉を見た時から気になっていた事でもある。

「……はい」

「アヤカの事はどこまで聞いている？」

「〈ヤミヒメ〉の元のパイロットで、〈教団〉のシスター。そして、アサトさんの師匠だったと。……どんな方だったんですか？」

アサトの顔色を窺いつつ、どこまで踏み入っていいものかと恐る恐るカスミは訊いてきた。

「綺麗なヒトだったよ。それでいて屈託なく笑うと子供みたいで、捉えどころがなくて、自分のルールで生きてるみたいなの……そんなヒトだった」

懐かしむように遠い目をするアサトの言葉を、カスミは黙って聞いていた。

「あの傷はアヤカが最後に〈ヤミヒメ〉に乗った戦闘で受けた。それが原因でアヤカは意識不明の重態。二度と〈ヤミヒメ〉に乗る事はなかった……。」

あの傷は戒めなんだと。大事なヒトを護れなかった自分を罰するための」

ゾイドには自己修復機能がある。人間の肌のように、装甲の傷であれば自分で治すことができる。それをしないという事は、〈ヤミヒメ〉が傷を消す事を拒んでいるという事なのだろう。

「以来、俺が戦闘で傷を負ったり、今回みたく寝込んだりすると、自分を責めて心を閉ざすようになった。アヤカを失った時の事を思い出して、俺もそうなるんじゃないかって不安になって……。」

〈漆黒の狂襲姫〉なんて呼ばれてるが、強がってるだけで、本当は寂しがり屋で臆病なんだよ」

アサトは〈ヤミヒメ〉を見上げて、そこで言葉を切った。  
ハンガーに静寂が訪れる。

「……だったら……」

先に口を開いたのはカスミだった。

「だったら、早く慰めて——安心させてあげてください」  
アサトの話を聞いて、カスミはいたたまれなくなった。

「私だったら……そうして欲しいです——」

〈ヤミヒメ〉の気持ちが届くほどよく判った。『彼女』は自分と同じだ。強がってるけど、本当は誰かに手を差しのべて欲しい。

「……それは一般論か？ それとも——乙女心ってやつか？」

〈ヤミヒメ〉に向けていた視線をカスミに向け、平坦な口調でアサトは訊ねた。

「……朴念仁のアサトさんには、教えてあげません」

先ほどの苛立ちの意趣返しとばかりに、カスミは意地悪く言ってみた。それは普段の彼女の表情を見慣れていなければ気付かないような微妙な変化だったが——

「手厳しいな」

微苦笑を浮かべながら、アサトは呟いた。

「ありがとうな、カスミ」

「なにがですか？ プログラムのお礼ならもう……」

「それでもだよ」

「……………はい」

アサトはやれやれとため息をひとつ吐くと――

「そんなじゃあ、お姫様を慰めにいきますか」

そう言うと彼は愛機のコクピットに乗り込んだ。



五感――視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚。

人間はこれらの感覚をもつて自らの置かれた状況を認識するが、アサトが最初に感じたのは触覚だった。

後頭部に感じる柔らかな感触。どうやら枕のようなものに頭を載せて寝ているらしい。

周囲はただ静かで、聴覚から得られる情報はない。

人間は多分に視覚に頼った生き物だと、今更ながら思い知る。

ぼんやりとした意識で、瞼をゆつくりと開く。光が目に入り像を結ぶ。

「――やっと起きたか」

声と共に、アサトの視界に自分を見下ろす娘の顔が入った。

二十歳になるかならないかくらいの若い娘だ。長い漆黒の髪を胸元まで垂らし、後ろ髪

は高い位置で一本に纏められている。いわゆるポニーテールだ。

「起きたのならば早く降りろ……膝が痛くてかなわん」

橙色の瞳をアサトから逸らしながら付け加える。不機嫌そうな口調だが、娘の表情に

嫌悪の色はない。むしろ嬉しい気持ちを悟らせまいと、わざと不機嫌を装っているように

見える。

「せっかく逢いに来たのに、つれないな」

娘の膝から頭を起こしつつ、内心で苦笑するアサト。

「べ、別に私が頼んだ訳ではない」

応える娘は視線を合わそうとせず、そっぽを向いたままだ。

アサトは改めて娘と正面から相対した。

か弱さとは無縁な、凛とした強さを感じさせる美しい娘だ。

身を包む衣装は、ゆったりとした面積の広い漆黒の布地を、『オビ』という紅い幅広の腰巻でくくった『キモノ』と呼ばれるものだ。東方大陸の民族衣装で、主に冠婚葬祭などの

の行事や式典で女性が着る正装である。

キモノ自体が頻繁に目にするものでないため、それだけでも娘の容姿を目立ったものになっているが、更に彼女の特異性を際立たせているものがある。  
まずは耳だ。

数が多いのでも少ないのでもない、人間と同じく左右にひとつずつ備わっている——しかし、その形状が違っている。ケモノを思わせる三角形に近い形状をしており、位置も側頭部ではなく頭頂部に近い。更に腰の低い位置に、決して人間には備わっていない器官がある。こちらもケモノを思わせる豊かな毛並みに覆われている——尻尾だ。どちらも娘の表情に合わせてか、ぴくぴくと動いており、作りものではないと判る。

そう——彼女は人間ではない。

「まあなんだ、こうして逢うのは久しぶりだな——ヤミヒメ」

「……まったくだ——我が主よ」

取り成すようなアサトの言葉に、ヤミヒメと呼ばれた娘はようやく目を合わせて、拗たように言った。

ゾイドは死ぬとその体内からゾイドコアを排出する。これが言わば『ゾイドの卵』だ。すべてのゾイドは子を生む事が出来る。だからゾイドに性別は無い——無い、とされている。

ゾイドの性別に関する意見は諸説あるが、具体的な結論は出ておらず、半ば放置されているのが現状だ。

兵器として、労働力として過不足なく扱え、ある程度の人工繁殖も可能となれば、性別など瓊末な問題だからだ。

道具は使えればいい。構造や原理など、使う人間には興味の外だ。

しかし、『知らない』ことは『存在しない』ことと同義ではない。



その部屋は限りなく『和』を意識した空間だった。

床には『タタミ』が敷かれ、壁は『ショウジ』で仕切られ、光源は『アンドン』と呼ばれる照明具が備え付けられていた。

東方大陸は惑星・地球の『ニホン』の文化体系を色濃く反映した土地だが、いわゆるマ

ニアか一部の好事家こうさつかでもなければ、ここまで『和』を再現した空間は所有してはいまい。ただし、ここは現実リアルではない。(ヤミヒメ)の記憶装置メモリの空き領域に創られた仮想空間マトリックスだ。そして、今アサトと相対している、ケモノの耳と尻尾を持つ娘——ヤミヒメの姿も、ヒトとコミュニケーションを円滑にするための対人インターフェイスでしかない。

ゾイドに性別はない——しかし、『彼女』が女性の姿を採とっているという事実は、(ヤミヒメ)が『女性格』である事を示している。

もつとも、そんなことはアサトにも、当の本人にもどうでもいい事ではあった。

「……………」

言葉が出なかった。

話したい事はたくさんあったのに、いざ彼を目の前になるとなにも言えなくなってしまふ自分がいた。

嬉しいはずなのに、それを素直に表現できない。

つい、心にもないことを言っつて、そつけない態度をとつてしまふ。

彼にはそんなヤミヒメの心は見透かされているので、取り繕つくろう事に意味はない。

それでも、つまらない意地をはつてしまふ……………」

「それで、なにをしに来た。無様な私おかしなを笑いに来たのか？」

まただ。素直に嬉しいと言えばいいものを。

「んー？ 別に——あ、骨、食うか？」

わざわざ用意してきたのか、アサトはペット用の骨を取り出した……………イヌ用の。

「アサト……………何度も言わせるな。私は誇り高いオオカミだ、イヌところなんぞと一緒にするな！」

「ん、そうだったな。孤独を愛する、けど寂しがり屋の——可愛いお姫様だったな」

「……………」

いつもこうだ。ヤミヒメがいくら邪険にしても、彼は嫌な顔ひとつせず彼女に付き合つてくれる。

「ふん、可愛くなどない。私なんぞに構っていないで、あのカスミとかいう小娘とよろしくやっつていればよかろうに」

「なんだ、妬やいてるのか？」

「言っている。自意識過剰おごりも甚はなはだしいな」

「そっか……………それは残念」

特に落ち込んだ素振りも見せず、言葉面ことばづらだけでアサトはそう言った。

つくづく自分が嫌になる。口を開けば憎まれ口を叩くことしか出来ない。

「……………」

「……………」

再びの沈黙。

本当は判っている。アサトはヤミヒメを慰めに來たのだ。

しかし彼はそう言わない。

言えば、へそ曲がりの自分が意固地いこじになってしまおうと知っているから。

「—なあ、ヤミヒメ」

「……………」

判っていた——アサトの次の言葉が。

「触さわっていいか？」

「……………」

せめてもの抵抗と、わざとぶっきらぼうに言ってみるが、これも意味などない。

アサトの右手が、ヤミヒメの黒い髪をやさしく梳すく。

そして左の頬ほおにそっと触れる。

気恥ずかしさと、彼に触れられている嬉しさと頭がぼーっとなり、ヤミヒメは何も考えられなくなる。

ヤミヒメもアサトも話すのはあまり得意ではない。

言葉は不便だ。重ねれば重ねただけ誤解を生む。

本音を押し隠してしまう。

だから彼はこうしてぬくもりを伝えようとしてくれる。

「んっ……………」

彼の手が首筋に下りる。びくんと身体からだが反応してしまう。

「痛むか？」

「別に……………」

声が出てしまった恥ずかしさを隠すため、俯うつむいて言う。

「傷、治さないのか？」

「……………」

アサトが触れている首筋には、二条の傷跡がある。

ヤミヒメが事あるごとに塞ふさぎこんでしまう原因となった傷跡。

「まだ自分が許せないか？」

「許せる訳がない——いや、許してはいけない。私は愚かだ。この傷を消してしまったら、また私は同じ過ちを繰り返してしまう。だから、この傷は戒いましめだ。私の罪を忘れないだ

めの」

そうだ。アヤカを失った時のような思いは、もう二度としたくない。

なのに――

「なのに、私はまた貴方を傷つけてしまった。貴方を護ると誓ったのに……」

「そんなに思いつめるな。こうして生きてるんだ、なにも問題ない」

「……………」

言葉が出ないヤミヒメにアサトは嘆息し、

「――あ……………」

次の瞬間、彼女は彼に抱きしめられていた。

広いとは言えない胸板。お世辞にも逞しいとは言えない体躯。

それでも安心した。

アサトに想われていると実感出来た。

「なあ、ヤミヒメ。俺は一般論は嫌いだ。言葉でならなんとも言える。だから、言葉で納得させようなんて思っちゃいけない」

彼の胸に顔を埋めたまま、次の言葉を待つ。

「俺とおまえは一蓮托生だ。これからも――最後まで」

「……………」

「だから――あまり自分を責めるな」

「命令か？」

「命令……………かな」

「心得た」

ヤミヒメの応えに満足したのか、彼女を抱く腕に一度力を込めると、彼は身を離した。

「あ……………」

名残惜しげに彼の顔を上目遣いで見上げる。

「ん？」

「その、なんだ……………命令を聞く代わりに、私からも頼みたい事がある」

「ん、なんでもいいぞ」

「目を、瞑ってくれないか」

「ああ」

彼が目を閉じたのを確認し、ヤミヒメは呼吸を整える。

「私はここに改めて宣言する。我が主を、私の全身全霊を持って護り抜くと」

アサトは無言で聞く。



「これからも私と共に在ることを、貴方は受け入れてくれるか？」  
「ああ」

気負いも迷いも感じられない。簡潔なまでの了承。

「ならば、これは契約の証だ——」

ヤミヒメはアサトの両肩に両手を乗せ、少し背伸びをする。

透巡は一瞬、彼女は彼の唇に自分のそれを重ねた。



目が覚めると橙色のキャノピーが目に入った。

『マスター、大丈夫ですか？』

続けて、女性のそれを思わせる機械音声がアサトの耳朶を打つ。

「……クノキ？」

『はい。心拍・脈拍ともに正常。意識の混濁も認められません。正常に通常空間への復帰を確認』

アサトが居るのは言うまでもなく〈ヤミヒメ〉のコクピットだ。

「そうか——」

『同調』による意識の共有——俗に精神感応と呼ばれる現象。

アサトが行ったのはまさにそれだ。

クノキのサポートにより、『同調』を意識レベルに絞って、〈ヤミヒメ〉の深層意識に送り込む。

モード2使用時と同じく、自我の崩壊——〈ヤミヒメ〉がアサトを帰さない可能性があるため、クノキはこの方法を使いたがらないが。

「……………」

アサトは自分の口元を覆うように右手を翳した。わずかに残る唇の感触……。

『……どうかされましたか？』

心なしか、クノキの口調が陰しく聴こえる。

「いや、なんでもない——なあ、〈ヤミヒメ〉」

——ウオオンッ！

主の言葉を肯定するように、漆黒の乙女は吠いた。

